

# 九州大学 経済学部 同窓会報

第64号

九州大学経済学部同窓会  
事務局 〒812-8581  
福岡市東区箱崎6-19-1  
九州大学経済学部内  
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348  
mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp  
郵便振替 01750-6-21743

## 目次

## 平成30年度行事予定(総会のご案内) / 1

研究院長挨拶 経済学研究院長 磯谷 明德 / 2

事務局長挨拶 同窓会事務局長 藤井 美男 / 3

## 追悼文

松下志朗君の思い出 秀村 選三(昭和22年卒) / 4

深町郁彌先生を偲んで  
川波 洋一(昭和51年卒・昭和53年博士入) / 6

## 支部だより

東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 8

事務局次長 林 秀信(平成3年卒) / 8

学生歌『松原に』をめぐる雑感

副支部長 杉 哲男(昭和43年卒) / 9

関西支部 事務局長 谷村 信彦(平成3年卒) / 10

大阪の観光レポート(No.2) 谷村 信彦(平成3年卒) / 11

## 福岡支部

九州大学アカデミックフェスティバル2017探訪記  
福岡支部事務局 / 12

マルクスとマックス・ウェーバーとドラッカーと世界平和(講演要旨)  
森 悦次郎(昭和45年卒) / 13

福岡支部交流ゴルフ会、第63回コンペを開催!  
折田 博之(昭和60年卒) / 14

平成29年忘年会を開催 白須 浩司(昭和59年卒) / 15  
お知らせ / 15

## 一読千金

『IFRS適用のエフェクト研究』 小津 稚加子(現教員) / 16

## リレー随想

学生歌『松原に』をめぐる 秋山 喜文(昭和30年卒) / 17  
「九大どげん会」100回記念大会に寄せて!

田中 健二(昭和40年卒) / 18  
ファントムの夏と経済学部の残影

堀内 隆治(昭和40年卒・昭和42年博士入) / 20  
学生時代の思い出 筒井 豊春(昭和49年卒) / 22

九大の思い出と公認会計士の仕事  
柴田 祐二(昭和59年卒・昭和61年博士入) / 24

つながり—経済学部からQBSへ—  
藤吉 由貴(平成14年卒) / 25

## 私の留学生活@九大

藤本(金) 海艶(平成17年卒・平成28年博士入) / 26

## インターゼミ報告

小津ゼミ(経済・経営学科3年) 矢上 寛大 / 27

鷺崎ゼミ(経済・経営学科3年) 江島 智揮 / 28

## 同窓会会則 / 30

## 同窓会歴代会長 / 32

## 同窓会会費納入のお願い / 32

## 平成30年度行事予定(総会のご案内)

平成30年度の全国総会・各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お問い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

### 平成30年度 関西支部総会

日時 平成30年5月19日(土) 15時～

場所 ハートンホテル北梅田  
(大阪市北区豊崎3-12-10 TEL(06)6377-0810)

<お問い合わせ先> 関西支部事務局 谷村 信彦  
公益財団法人 大阪観光局  
TEL(06)6282-5908  
E-mail tanimura-n@octb.jp

### 平成30年度 全国・福岡支部合同総会

日時 平成30年6月8日(金) 18時～

場所 ホテルオークラ福岡  
(福岡市博多区下川端町3-2 TEL(092)262-1111)

<お問い合わせ先> 福岡支部事務局 高木・国生  
公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721-4900  
E-mail soumu-02@kerc.or.jp

### 平成30年度 東京支部総会

日時 平成30年7月7日(土) 16時～

場所 学士会館 210号室  
(東京都千代田区神田錦町3-28 TEL(03)3292-5936)

<お問い合わせ先> 東京支部事務局 吉元 利行  
株式会社オリエント総合研究所  
TEL (03) 5877-5590 FAX (03) 5877-5859  
E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)  
t29yoshimoto@aol.com(自宅)

### 平成30年度 広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成30年11月開催予定

場所 未定

# 研究院長としての挨拶



経済学研究院長  
磯谷 明德氏

2015年4月から、経済学研究院・学府・学部の運営の舵取りを仰せつかり、2017年4月には再度2年間の研究院・学府・学部の運営を仰せつかりました。2018年度は再任期間の最後の1年となりました。この間、同窓会の皆さまには、様々なご指導・ご助言をいただきました。研究院長の職務を仰せつかるまでは同窓会活動を外側から眺めているだけで、卒業生・同窓会の皆さまとの連携の重要性を十分に認識することもできずにおりましたが、この3年間は、研究院・学府・学部の諸活動を遂行する上で、同窓会の皆さまとの連携がいかに大切かを新たに、そして改めて認識することのできた3年間となりました。今後も現役の教員・学生たちと同窓会の皆さまとのつながりを一層深めていくことに努めるべきだと考えますし、さらに他の部局が実施しているような現役学生の保護者との交歓や連携を深めるような機会を新たに設けるべきではないかとも考えています。その際、われわれ教員組織が行うべきことは、卒業生及び同窓会の皆さまへの本部局の教育研究活動に関するより積極的な情報の発信であり、さらには現役学生の保護者への情報の提供、加えて経済学部を目指す将来の学生たちとその保護者への活発な情報提供であろうと思います。

今年度は巷間で取りざたされている「2018年問題」の年にあたります。2018年には、18歳人口が再び減り始め、2031年の間に33万人もの減少が予測されています。今後は大学進学率もほぼ頭打ちになると予測されていますので、18歳人口の減少はダイレクトに大学進学者数の減少につながるようになります。当然、大学間での学生の獲得競争は今まで以上に熾烈になります。これに対する本部局の対応策は、すでに昨年4月の同窓会報（第62号）でも述べましたように、「学部・学府一体となった教育研究の国際化・グローバル化の推進・強化」の下、それを具体化する魅力ある教育プログラムを構築・提供し、それを

実効性あるものにするということです。単なる弥縫策ではない、地に足をつけた地道な努力を続けることで、国内外から意欲と能力のある学生を受け入れ、本部局の教育研究力の着実な向上につなげていきたいと思っています。

ところで、2018年という年は、間違いなく本部局にとって大きな節目の年となります。本学において先陣を切って開始された中国人民大学経済学院とのダブルディグリープログラム（大学院修士課程）は、2018年には開始から10周年を迎えます。来る4月15日には、北京の中国人民大学で3回目の協定更新が行われるとともに10周年を祝うセレモニーが開催されることになっています。この10年間に、人民大学から32名の学生を迎え入れ、本学府と人民大学経済学院とから2つの修士号を得た彼ら、彼女らは、今や中国を代表する民間企業や中国政府の中枢において活躍していますし、欧米の有名大学院に進学した学生も数名います。また英語によってのみ修士と博士の学位が取得できるコースとして経済工学専攻に開設されたG30経済学国際コースも、2019年にはその開始から10年目を迎えます。そしてなによりも、2018年の9月末日には、長年住み慣れた箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転が完了します。「新しいぶどう酒は新しい革袋に」の喩えの通り、学部・大学院においては、この伊都キャンパスへの移転に合わせて、学部・大学院一体となった教育研究の国際化加速に向けた学部・学府双方におけるグローバル人材育成プログラムとして、3つの新しい教育プログラムがスタートします。

第1は、**学士課程国際コース「グローバル・ディプロマプログラム (GProE)** (<http://www.econ.kyushu-u.ac.jp/GProE-HP.pdf>を参照) です。学部2年次生から履修が始まる経済学分野の高い専門性を備えたグローバル人材育成プログラムをその内容とし、学士課程においてアウトバウンド型教育プログラムを体系的に推進することを目的としています。

第2は、**学府「グローバル・ビジネスサイエンス・プログラム (GBSP)** ([http://www.econ.kyushu-u.ac.jp/english/admission\\_information/pa\\_21.php](http://www.econ.kyushu-u.ac.jp/english/admission_information/pa_21.php)を参照)。大学院レベルの包括的なビジネスサイエンス教育の推進と充実を図るとともに、海外からのインバウンド需要を積極的に取り込むことを意図して

います。経済工学専攻では、このプログラムが昨年10月からスタートしていますし、本年10月からは経済システム専攻においてもスタートします。

そして第3は、**文系4学部における「学部横断型・専門領域型副専攻プログラム」** (<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/topics/view/1320>を参照) です。これは文系4学部のそれぞれに特定のテーマでの横串を入れる形の「横断型」と、自学部以外の専門領域を深く学ぶ「専門領域型」という2つの副専攻プ

ログラムを設置し、文系学部に所属するすべての学部学生に開放するというものです。「九大文系版ダブルメジャー」であるこの学士課程教育プログラムは、2018年4月からスタートします。

同窓生の皆様には、これら3つの新しい教育プログラムのスタートアップを温かく見守っていただくとともに、時には厳しいお言葉も賜りますれば幸甚です。2018年度においても、皆様のご指導ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。

## 平成30(2018)年度入学式 新入生320名 平成29(2017)年度卒業式 卒業生356名



同窓会事務局長

**藤井 美男氏**

平成30年4月4日(水)、伊都キャンパスの椎木講堂で平成30(2018)年度入学式が行われた後、4月6日(金)に箱崎キャンパス大講義室にて経済

学部オリエンテーションが開催されました。社会人中心の産業マネジメント専攻(九大ビジネススクール、略称QBS)の入学式は、4月7日(土)に、箱崎キャンパスの旧工学部本館大講義室で開催されました。入学者総数は320名で、内訳は経済学部経済・経営学科151名、経済工学科86名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻39名、産業マネジメント専攻44名です。経済学部オリエンテーションでは、貫正義同窓会長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。

3月20日(火)には、福岡リーセントホテルで東京・関西・福岡の各支部役員や名誉教授の参加のもと、経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業記念祝賀会が開催されました。経済学部卒業生は257名で、うち経済・経営学科163名、経済工学科94名です。経済学府修士課程修了生は99名で、うち経済工学専攻16名、経済システム専攻31名、産業マネジメント専攻52名です。祝賀会では若手研究者への研究支援、学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与も、磯谷明德研究院長により行われました。以下が平成29年度

の受賞者です。

### 修士論文・プロジェクト論文

- |                |               |
|----------------|---------------|
| (1) 経済工学専攻     | 清水 慶太         |
| (2) 経済システム専攻   | 虞 尤楠<br>安部 伸哉 |
| (3) 産業マネジメント専攻 | 吉田 健<br>安藤 良祐 |

### 成績優秀者

- |             |                |
|-------------|----------------|
| (1) 経済・経営学科 | 居坂 克洋<br>早瀬 直人 |
| (2) 経済工学科   | 町田 達裕          |

本年度も各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協力を仰ぎ、一年間の活動と行事をつつがなく終えることができました。関係の皆様方には心より御礼申し上げます。2018(平成30)年9月に箱崎から伊都キャンパスへ移転、同10月から後期授業開始という日程が目前となって参りました。全学の卒業式が伊都キャンパスの椎木講堂で行われ、箱崎キャンパスへ移動して個別の学位記授与そして卒業祝賀会という一連の日程も今年3月で最後となりました。来年3月の卒業祝賀会をどのように開催するか、学内理事を中心に鋭意検討中です。何事にも「箱崎最後の」という形容句が付くようになり、文系地区の今の景観が見られるのも9月頃までです。機会がありましたら、懐かしいキャンパスにお立ち寄りください。

昨年度の総会で御承認を頂き「九州大学同窓会連合会」と経済学部同窓会の名簿データ共有という協力関係が新たに出来上がりました。財政問題という



大きな懸念を抱えつつではございますが、今後も貫正義会長を先頭に、同窓会活動の更なる充実を図って参りますので、各支部同窓会役員の方々ならびに

同窓生の皆様方へ一層の御協力をお願い申し上げ、新年度の御挨拶といたします。

## 追悼

## 松下志朗君の思い出



2017年4月8日撮影

九州大学名誉教授  
秀村 選三氏  
1947(昭和22)年卒

I. 私が鹿児島大学文学部に出張講義を数年続けていたのはいつごろだったろう。

鹿児島も冬は寒いので学生もオーバーを着て聴講していたが、松下君の話では、私が教室に入るなりオーバーをぬいだそうで、それが私の第一印象らしく何度も話していた。そのころ鹿児島の地方史の研究会のあとの懇親会で先生方と話していたら、面高先生と村野先生が「松下という学生が先生の講義を聴いて、九大の大学院で先生の指導を受けたいと言っています。入試はどうしたらよいですか」と訊ねられた。私は経済学部なので、経済の試験科目は、外国語二科目、経済理論、経済政策で文科出身の人には無理ですから、むしろ文学部の大学院を受験するよう指導してください、文学部の大学院に来たら法文経は同じ建物で学際的にも親しくしていますから一緒に勉強できますと言った覚えがある。

やがて彼は文学部の大学院にきたので、九州文化史研究所にいた鹿児島出身の桑波田興君を紹介し、三人で薩摩藩のことを語り合うのは楽しかった。彼は桑波田君に啓発され、桑波田君が研究所の非常勤研究員で宿直する時には松下君も泊まりこんで、ダベっていたようである。

年代がはっきりしないが、藤本隆士君と私が佐賀の鍋島家の内庫所の文書を調査して公務員宿舎に泊まりダベっていた時、九大の研究生たちの話になりその中で、松下君についてはお互いよく知っていて将来伸びるよと言ひ、思いつきで彼を福岡大学に採用しませんかと言ったら、藤本君も乗り気で、多少の曲折の末に松下君は、福大に採用された。福大の日本史の講師、助教授時代はのびのびと研究していたようである。しかし九大経済学部に来てからは、経済の連中の、常にはズボラで時に真面目とい



う気風にはなじめず、以前ののびのびとした気風はなくなった。彼はただ真面目に自分に厳しく、研究に熱心であった。

II. 彼が福大の親しい英語の先生と奄美大島に行くので、来ませんかと誘ってくれたのでお願いし、「多久古文書の村」の細川章さんと服部民子さんも来て総勢五人。松下君は鹿大卒業後大島で高校教員をしていたので、彼の案内で楽しい旅になった。

透き通るほど美しく、珊瑚も見える美しい海で泳ぎ、海辺の彼の親しい方のお宅では驚くほど山盛り一杯の雲丹をいただき、おいしかったのは忘れられない。

彼は大島には以前からの親しい友人がいるので毎晩焼酎を呑んで楽しそうに帰ってきていたが、朝は私たちと共に起きるのは辛そうだったが努めてくれ、美しい海辺や木立の森蔭に案内し、彼も知らなかった古文書にも出会い、手分けして写すなど楽しい旅であった。私は薩摩藩が幕藩体制下、沖縄はじめ多くの島々と広い海域を支配する領国の独自性に気づき、後に西南辺境型領国を構想するヒントを与えられた貴重な旅であった。

彼は後に南島関係の史料集を数多く刊行したが、若い日から大島はじめ南の島々への思いは一生貫いていた。私も大隅高山郷の研究をしながら、高山郷の浦町と大島はじめ南の島々、さらに大坂との通航、商品流通を考えさせられたのは幸いであった。

時の前後を忘れていますが、田川郷土研究会がダムに沈められる福岡県田川郡津野村の緊急調査をすると言った。津野は九大農学部の伊東兆司教授が昭和初年に調査され、優れた論文を書かれた地域内の一つの村なので調査に加えてもらった。私一人では無理と気づいて藤本、松下両君に参加をお願いした。松下君は村の人口・土地・石高等について大きな表を作り、それらの推移を克明に書き入れてくれた。毎日山に登り、日時に追われながら旧家の古文書を学び、主家の墓を囲む名子の墓や小御堂など美しい

歴史的環境での調査は大変楽しかったが、原稿の執筆に追われ、始終ダムとは何か、文化とは何か、経済の発展とは何かと語り合うことが多かったが、未だに解決できないままの課題である。

その後田川郷土研究会が天保元年（1830）より昭和43年（1968）までの田川郡の歴史と筑豊の石炭産業史を年表にしようと、慶応の院生田中直樹君（彼は大学紛争に失望し福岡に帰っていた）と私が誘われた。初め田川のグループは郷土史に重点を置いていたが、田中君と私は石炭産業が全面的に崩壊しつつある時だけに、石炭史に重点を置いてのカードの作成、年表の原稿作成に全力を挙げた。多くの市民、研究者が加わり、全員全く無償で取り組んだのは、あの時代であったからこそだと思う。石炭とは、近現代の筑豊とはと問い、烈しい討論の連続であった。編纂代表の田中直樹、永末十四雄、私のもとで松下君は編纂幹事の一人として編纂員たちとの連絡をしてくれた。

私が今までの研究を放り出して石炭年表に熱中しているのを藤本君、武野要子さんが心配して松下君に「田中直樹君が私をそそのかして石炭研究に引き入れているから田中君を監視してくれ」と頼んだため、彼は田中君について廻り、筑豊のボタ山の上で田中君に「貴君を監視するために、ついて廻っている」と言ったそうで、彼らしく純真だなど思い、彼には「私の父が若い時から満州で活躍し中国の山東石炭産業の社長もして、石炭のお蔭で私達兄弟は学問できたので、石炭への報恩と思ってやっている」と言ったこともあった。

そのころ松崎武俊氏（当時、福岡県警の巡查）が何度も来て部落史の研究をしようと説得され、さらに松源寺に連れて行き井元麟之さんと三人でお話した。私も恩師の宮本又次先生が経済学部に入れられた筑前革座文書を研究しなければと思っていたので、部落史の研究会をしようと覚悟を決めた。私は松下君に部落史をしようと思う、経済学部には革座の文書もあるし、君も一緒にしてくれませんかと言った。その時の彼の当惑した表情は今も忘れられない。私は部落史研究会を始めて彼もよく協力してくれた。私のゼミ出身の原口頴雄君を事務長にしたのを、市民研究者数人とともに育ててくれた。ことに経済学部所蔵文書を『筑前国革座記録』上中下三巻として出版（1981、82、84年）、さらに『松原革座会所文書』第一第二巻（1991年3月）を出版したのは貴重な仕事である。さらに九州各地の部落解放史を執筆された。『九州被差別部落史研究』（明石書

店、1985年）、『近世九州の差別と周縁民衆』（海鳥社、2004年）など、部落解放史での研究の彼の足跡は大きい。

松下君に外国出張の機会が廻ってきた時にはハワイを選び、太平洋戦争中にアメリカに居住していた日本人の多くが被害を受けた事実をハワイ大学の人と共に調査、報告するなど、彼らしいユニークな研究をしており、差別とか偏見に対する彼の気持ちは大きかった。

私は、福岡県知事から県史編纂を何度も頼まれたが断わり続け、松下君も断ってくれと言っていた。が、要請が十数度に及んだうえに、私の旧制福岡高校の恩師玉泉大梁先生の後には編纂がストップし、しかも古文書の散逸は甚だしく、何とかしなければと苦慮して、ついに敬遠していた編纂の重荷を負うことにした。私は自分の著書の出版や研究も断念し、多くの学界、民間の人々と共に編纂をし、責任も重く、最も苦しい時代であったが、松下君も私の補佐に大変であった。彼は私を支えて多くの県史資料を刊行してくれて、心から感謝した。私が県史編纂の副会長（会長は知事）を長年続けた後、松下君がしばらく替わってくれたが、急にやめたので、やむなく藤本君に引受けてもらったが、彼も苦しかったのであろう。しかし彼の担当の県史刊行はその後忠実に続けてくれた。やむなく彼にお願いするよりほかなかったが、もっと深く考慮すべきだったと思い、彼に申し訳なかったという思いは消えない。

Ⅲ. 彼の研究業績で最も著しいのは石高制の研究であろう。彼が大学院に来た頃、私は福岡藩の夫役の研究をしていて、貢租と夫役は幕藩体制の基礎だから夫役の研究をしていると言ったことがあった。私はその後は下人、奉公人の研究に集中して夫役はそれほど出来なかったが、彼は貢租、石高制の研究を長く続け、それは最も評価される業績である。三好不二雄佐賀大学名誉教授が彼の佐賀藩の地米制の研究を激賞されたこともあり、また難しい南九州の藩の石高を研究し、対馬藩の独特の土地制度を石高制の観点から論じたのはまことに独特であった。彼にはユニークな構想、多くの試論があったと思われ、これが全体像になると凄いぞと思っていたが、残念なことに長い病床生活のため未完成になって、その全体の構想を学べなかったことはまことに残念というほかに、彼の不運を悼むのみである。

それにしても彼は大変努力をした。彼は経済学を知らないと言っていたようで、私も経済学は知らないと言っていたが、松下君には気休めの言葉に過

ぎなかったらしい。後に西村明君が経済学部に来て仲よくなり、表情も明るくなり、木下悦二先生、森本芳樹・西村明君らと魚釣りをして、福岡の東部住まいの方々なので東部漁業組合と言って楽しそうであった。彼は学界では社会経済史学会の評議員、理事、九大では評議員、『九州大学七十五年史』編纂委員長などをしていた。

私は彼にはどれほどお世話になり、助けられたか知れない。我儘な私には手を焼いただろうとも思う。

もっと直接にお礼を言うべきだったと思う。彼には私の薩摩藩高山郷の研究を継いでほしいと願っていたが、むしろ日向や薩摩の名頭地主の研究をされていたので期待していたが、これも大病のため継続できなかった。まことに不運というほかない。

それにしても若い日に紆余曲折しながらも、まっしぐらに突き進んできた彼の生涯は、まさしく薩摩隼人だったと思う。大変お世話になりました。

松下君、有難う。安らかに、安らかに眠りたまえ。

## 追悼

## 深町郁彌先生を偲んで



九州大学名誉教授  
下関市立大学学長

川波 洋一氏

1976(昭和51)年卒  
1978(昭和53)年博士入

九州大学名誉教授で、熊本

学園大学、九州情報大学においても教鞭をとられた深町郁彌先生が、2017年11月21日、お亡くなりになった。先生は1929年9月のお生まれであり、88年のご生涯であった。

筆者は、1973年、3・4年次演習の履修にあたり、深町ゼミを希望し、爾来44年の長きにわたってご指導を受けることになった。先生は、その前年に、2年次後期のドイツ語経済を担当された。筆者は、この授業に参加して先生に初めてお会いしており、その時から数えて私のこれまでの人生の3分の2以上を先生とともに過ごさせていただいたことになる。

深町郁彌先生と筆者との関わりは、このように長い時間にわたり、加えて研究活動や学会運営、同じ大学での教育研究活動、学内の行政的な仕事、同窓会その他学内外での活動に及んでおり、その全てにわたって思い出を綴ることは不可能である。ここでは、筆者が研究テーマに関心を持つようになったきっかけや学部・大学院でのゼミの様子に絞って思い出を綴ることとしたい。

先のドイツ語経済では、Bevor Das Kapital Entstand という、『経済学批判要綱』に基づく『資本論』の成立過程の解明を主題とする書物が指定された。このテキストの選択から窺えるように、40代初めであった先生の研究の中軸は、貨幣論や信用論にかかるイギリス古典学派の著作にとどまらず、高



学部長時代の深町先生

木幸二郎先生を中心に翻訳作業が進められていた『経済学批判要綱』にあったように思われる。その影響もあってか、3年次の演習に参加してからの教材は、遊部久蔵『商品論の構造』や平田清明『経済学と歴史認識』さらにはご自身が1971年に上梓された『所有と信用』、『資本論』第三部第五篇といったものであった。貨幣論や金融論というより、経済原論の分野に入る書物を読みながら、ヒルファディング『金融資本論』、香西泰『現代金融の動態』といった金融論の内容により近いものを読んでいくというスタイルであった。ただし、選ばれるテキストは、現状分析的なものというより、古典的著作やしっかりした研究書が中心であった。

筆者の著書『貨幣資本と現実資本』のはしがきにも書いたことだが、3年次後期のゼミでは『資本論』第三部第五篇（第21～36章）を読むことになった。たまたま筆者は、その中の第30章の報告を担当することとなり、その完成度の低さもあり、筋の通った解説が極めて困難であり、その報告に随分難渋した記憶がある。『資本論』のこの部分は、当時の重要な経済論争の一つであった通貨論争に関わった経済学者達の著作、J.ウィルソンによって創刊され、バジョットが引き継いだ『エコノミスト』誌、イギリスの議会報告書等々、当時の第1級の資料を駆使してなされた、19世紀の初めから半ばにかけてのイギリス経済と金融市場の動向の分析であった。それは、完成度はそれほど高くなかったとはいえ、19世紀イギリスの金融と金融市場の分析としては当時の最高峰とも言える古典であった。とりわけ、第五篇の第

30～32章を中心に展開された貨幣量と現実資本蓄積、貨幣資本蓄積と現実資本蓄積との関連に関する分析は論理も辿りにくく、解釈が極めて難しい内容を有していた。偶然であったが、このテーマに全力で取り組んだ



後列左から4人目が深町先生、前列右から2人目が筆者、  
同左から2人目が中浜隆小樽商科大学教授、同5人目が前田淳北九州市立大学教授

ことが、その後研究者への道を進むことになった筆者の行く末を決めることになってしまった。その後、大学院を経て、大学の教員として働くようになってからも、学部3年次に根付いた問題意識をより豊富化し、練り上げていく努力を続けていったことになり、それは今なお継続中である。深町ゼミでは、研究者としての道歩み、そして自らの研究テーマを追求していくきっかけを与えていただいたことになる。

もう一つの思い出は、先生の在外研究に関わっている。先生は、1979年在外研究の機会を得られ、ロンドンのシティ・ユニバーシティに留学された。10ヶ月の留学であったが、この間になされた研究をもとに、岩波書店から『現代資本主義と国際通貨』が刊行された。筆者は、当時、博士課程に進学していたが、この機会を利用して東京のいくつかの大学のゼミに出入りし、同世代の研究者・大学院生との交流を結ぶことができた。慶應義塾大学の飯田裕康先生のゼミが中心であったが、一橋大学の高須賀義博先生には古典研究資料センターの文献を利用する際にお世話になり、また横浜国立大学におられた佐藤金三郎先生をお訪ねしたりしたこともある。筆者の研究者としての初期の論文はこの時期にこれらの大学の先生や院生との討論のなかから生まれたものでもある。論文の原稿はロンドンにもお送りしたが、

その都度先生からは薄いブルーの便箋に万年筆で認められた詳細な論評を何度もいただいた。ご自身のロンドンでの研究活動やイギリスの研究者、訪ねてくる日本人研究者のことも詳しく綴られていた。短い留学期間であったと思われるが、充実した極めてエキサイティングな研究活動である様子が窺えた。先の『現代資本主義と国際通貨』の第1章に組み込まれた国際通貨に関する論文は、留学中に九大の『経済学研究』に投稿されており、そのゲラ刷りが送られてきたこともある。何か新しいテーマに向かって躍動しつつある雰囲気を感じられたものである。筆者は、大学院生であったが、当時から学会の部会運営を担当しており、年3度開催していた部会の状況を報告するとその都度感謝の気持ちをあらわす書状が届いたものである。併せて、研究者としての最初の論文を直接指導できないことを詫言るとともに、お送りした筆者の原稿に対して論点整理や議論の進め方への鋭い指摘がなされていたのを思い出す。

筆者が修士論文を執筆する際、先生は学生部長を務めておられたので、大学本部での仕事に時間をとられ、なかなか経済学部でのディスカッションは難しかった。その分、こま切れであったとはいえ、学生部長室での議論もさせていただき、慌ただしいなかにも濃密な時間を持つことができたと思っている。先生ご自身は、「なかなか時間が取れず、すまん、すまん」といっておられたのを今思い出している。学生部長室でのやり取りやロンドンと東京・福岡間の手紙を通じた議論は、ゼミ室や研究室での通常の議論とは異なる空間で行われたものであり、ことさら思い出深いものがある。

上に掲載していただいた写真にあるように、深町ゼミは、年に数回ゼミ合宿を行うのが恒例であった。島原や志賀島も選ばれたが、もっとも回数が多かったのは九重の共同研修所での合宿であった。写真は、

昭和53年度  
卒業祝賀会  
逢坂充先生と





筆者が助手時代、学部の3・4年生と一緒に出かけた折に、共同研修所前の広場で撮られたものである。どのテキストを選び、何を議論したのかについては、記憶が定かではないが、おそらくこの時は九重登山もしたのではないかとと思われる。あるいは、もう少し近場の山（例えば一目山）であったかもしれない。先生は、大学のゼミ室・研究室や合宿先での討論だけでなく、温泉のなかや山登りの最中にも様々な話

を楽しんでおられた。できるだけ多くの時間を若者と過ごし、専門分野にとどまらず政治・経済のさまざまなテーマについて談論風発することが、先生の活動のエネルギーであり、教育の原点であった。

思い出は尽きないが、深町郁彌先生の薫陶を受けた者を代表し、感謝の意味を込めて、追悼の言葉とさせていただきます。

# 支部だより

## 東京支部

### 1. 理事会の活動状況

平成30年3月9日（金）午後7時から有楽町の九大東京オフィスにて、本年度第1回目の理事会を秦支部長、伊東副支部長、杉副支部長ほか新たな理事候補をふくむ合計14名の出席で開催しました。

理事会では、本年度の卒業祝賀会、新卒者歓迎会、7月総会の企画内容について協議しました。

また、昨年7月総会以降の支部活動状況として12月2日（土）の「九大OBOG現役懇親会」の報告をしました。この会は、鷺崎ゼミ現役生（3年生・4年生）と卒業生を中心として、その他多数の卒業間もない同窓生とで毎年開催しています。

なお、3月20日の卒業祝賀会には、杉副支部長をはじめ若手理事に参加してもらい、4月7日（土）の東京・品川での「新卒歓迎会」と7月7日（土）の総会・懇親会のアピールをしてもらうことになりました。

### 2. 若手理事会

東京支部では、三役・監事を除いた若手理事で同窓会の運営や企画について検討する若手理事会を不定期で開催しています。

今期は、12月2日（土）と2月17日（土）に若手理事会を開催しました。2月の若手理事会では、卒業祝賀会への派遣メンバーを中心に、新卒歓迎会の企画内容を検討しました。また、7月総会の企画と運営につい



て意見交換し、若手理事の補充などについて、理事会に提案することとしました。

【東京支部事務局長 吉元 利行 1978(昭和53)年卒】

### 3. 九大OBOG現役懇親会

2017年12月2日（土）午後6時から東京・五反田で「九州大学経済学部 東京OBOG現役生 懇親会」が開催されました。鷺崎ゼミの東京合宿のタイミングに合わせて2014年から東京都内で毎年開催されており、今回で第4回目の開催となりました。

第1回 2014年12月20日(土) 品川

(アウトバックステキハウス 品川高輪店)

第2回 2015年11月28日(土) 品川

(トップオブシナガワVIPルーム)

第3回 2016年12月10日(土) 赤坂

(ビストロ ケー - Bistro K)





## 第4回 2017年12月2日(土) 五反田

(Asian Dining PUERTO)

私は、経済学部同窓会東京支部事務局の立場で第1回から毎回参加させていただいていますが、年々参加者数が増えてきているように感じています。懇親会の途中には自己紹介タイムもあり、とても和やかな雰囲気でのOBOGと現役生の交流となっています。参加しているOBOGの経歴や職種はとても幅広いので、現役生にとって将来を考える良い契機になっており、就職先の選択、先輩訪問、仕事や生活上の不安などの相談など、卒業生と現役生、卒業生同士の交流につながっていると思います。今後は他のゼミにも広がっていくことで、より盛大な懇親会になっていくことを期待しています。



【東京支部事務局次長 林 秀信 1991(平成3)年卒】

.....  
学生歌『松原に』をめぐる雑感東京支部副支部長  
九大コールアカデミーOB会副会長**杉 哲男氏**

1968(昭和43)年卒

『国には国の文化があり、  
地方には地方の文化がある。  
大学は常にその国の文化、地方の文化、  
そして何よりも若い文化の代表者でなければ  
ならない。』

コールアカデミー永世名誉指揮者・藤井凡大氏(作曲家)の言葉である。アカデミーが目指すべき大切な心を示しており、座右の銘にしている。

若者文化はその時代と共にある。戦前、あの重苦しい時代にあって、『旧制高校寮歌』は若者の自治と自由の気風の中で、彼らの知性と情熱を凝縮した文化の象徴として、永く記憶に留まる楽曲であろう。戦後、新時代を担うべく我がアカデミーも誕生した。そして、寮歌の息吹を伝えるべく学生歌も生まれ、

その伝道役の一端をアカデミーは担ってきた。学生歌「松原に」について、雑感を述べてみたい。

**1、学生歌の誕生**

大学の記録「学生歌制定の由来」によると、昭和29年11月、最初の募集が行われ、学生歌選定委員会において選考した佳作4編のうち2編について作曲募集を行った。翌30年3月、2編への作曲がなされたのが「松原に」および「聳えて高き」であり、千代町国際劇場(現存しない)での「卒業生を送る夕べ」で初演されている。

「松原に」の作詞者、秋山喜文氏(アカデミーOB・30年経済)の記録によると、その募集の狙いは、「九大には昔から校歌がないし、それに類するものもない。そのため、入学式、卒業式の式典や、スポーツ行事の際など不便である。また、学生の精神的連帯のよすがとしてもこの種のものが多い。毎年学生から公募することとなった。」と記されている。(昭和58年1月、九大経済学部同窓会報より)

その後、学生歌募集がおこなわれたのは、昭和32年であり、この折の入選作が浜田幸一郎氏による「春の讃歌」である。歌詞の選考委員の中には、ドイツ文学者として有名な文学部高橋義孝教授の名前などがあり、全学を挙げての取り組みであったことがわかせる。また、入選歌詞に対する作曲募集においても、数点の応募の中から、鳥山隆三教授、九大フィル、コールアカデミーなどによって、荒谷俊治氏の曲が選ばれた記録がある。(昭和33年4月10日付け九大新聞より)。33年・中村忠彌氏の述懐によると、候補作品を審査するに当たり、実際に演奏し、審査する必要がある、アカデミーのメンバーがその役目を担ったという。具体的には、審査委員長鳥山先生のご自宅にアカデミーメンバー数名が参集し、応募作品を、当時、まだ珍しかったオープンリール方式の録音機器で吹き込み、総合審査会に提供し、入選作品が決定したという。なお、この学生歌募集の入選者に対する賞品は「腕時計」であったと、学生歌「聳えて高き」の作曲者・引野信一氏は述懐している。

**2、入学式での歌唱指導の変遷**

現在、九大に入学したメンバーが、まず、聴き、歌うのは学生歌「松原に」である。しかし、我々が入学した時(昭和39年)の曲は「春の讃歌」であった。その後、数年、この入学式歌唱指導は我々アカデミーが担っており、当然のごとく「春の讃歌」を指導していた。

しかし、九大混声合唱団が発足し、活動が活発に

なったこともあり、九混からも歌唱指導の要請があり、40年代後半から、隔年ごとの担当というルールが定着し、今日に至っている。昭和40年代は「春の讃歌」を指導していたようではあるが、50年前後に「松原に」に変わったようである。その背景は（1）一般の学生にとって、「春の讃歌」はメロディックで音程も難しく、「松原に」の方が歌い易い。（2）体育会系サークルが七帝大戦などで、応援歌として「松原に」を折にふれ歌った。「春の讃歌」より「松原に」が応援歌として相応しかつた。（現に、応援部は九大エールとして「松原に」を採用し、現在も演じている。）

### 3、校歌制定と学生歌『松原に』

学校とその校歌は切り離せない。しかし、九大をはじめ旧帝国大学にはどこにも校歌は無い。2009年と記憶するが、当時の落合副学長より、「九大創立100周年」の行事企画の一環として、「100周年を記念して新しく校歌を制定したいが、コールアカデミーに協力して欲しいのだが……」という非公式の打診があった。

私の意見としては、「みんなに歌われなければ、何の意味もなく、いつかは忘れられ、企画・制定者の自己満足に終わるのでは…。むしろ、60年前から歌い継がれてきた、学生歌「松原に」を校歌に順ずる愛唱歌として、広く流布する方が、既に卒業したOB・OGも含めて納得するのではないか。」と申し上げた。

その後、2010年の卒業式に当たり、大学より卒業

式での学生歌「松原に」斉唱の演奏依頼がコールアカデミーにあった。入学式での歌唱指導は恒例の行事として定着していたが、卒業式で演奏については、上記の落合副学長との意見交換が大きく影響していたと思う。

4 大学男声合唱ジョイントコンサートで交流のある、東大、東北大、北大の状況を述べよう。東大には「東京大学の歌」という校歌に代わる歌がある。作詞、北原白秋、作曲、山田耕作という、素晴らしい陣容であり、昭和11年、大学より校歌策定として、委嘱されてという。ところが、完成後、時の文部省から「待った」がかかって、校歌制定とはならず、単なる愛唱歌として歌い継がれており、神宮球場でも東大エールとして活躍している。しかし、校歌ではない。

東北大で校歌の代わりに歌われているエールは、学生歌「青葉萌ゆるこのみちのく」である。九大と同様、昭和20年代後半、学生歌の募集が行われ、その入選作品である。「松原に」などと同時期の学生の澁刺として雰囲気の名曲であり、東北大同窓生の中で、営々と歌い継がれている。

北大の校歌代わりのエールは、一般の人も良く知っており、我がアカデミーレパトリーでもある北大恵迪寮・寮歌「都ぞ弥生」である。札幌農学校時代からのこの「都ぞ弥生」は北大生の共通の愛唱歌であり、世代を超えて歌い継がれている。

（九大コールアカデミー部誌「讃歌」（17年3月刊）より抜粋・転載）

## 関西支部

### 「秋の勉強会」の報告

関西支部恒例の秋の行事「勉強会」が、11月11日（土）午後2時より、「ハートンホテル北梅田」にて行われました。今回の講師は、昭和46年九州大学経済学部に入學以降、47年間大学に在籍されている遠藤雄二准教授、演題は、「日本の職場における働き方改革について考える」でした。聴講者25名は、日本経済の大きな課題の一つである働き方改革に関する課題について、事例を参考にした遠藤先生の提言と理念に聞き入り、あっという間の1時間30分でした。内容は、この20年間の日本は、賃金は減少、賃金格差も拡大している。また、年間労働時間が長い、年休が取れない、残業も多い状況は変わっていない。

このおかしい働き方をどのようにしたら変えることができるのか。この課題に対して、2つの職場の理想的な働き方の事例を紹介されたうえ、生産性向上というキーワードからの課題解決策の提言をいただきました。

一つ目の職場は「未来工業」。岐阜県に本社のある未来工業は社員数約800名の電気資材メーカーであり、「日本一社員が幸せな会社」「元祖ホワイト企業」として話題となっている。その職場環境の特徴は、①就業時間は1日7時間15分で、残業は原則禁止 ②年間休日は140日で「日本一休みが多い会社」として表彰された ③終身雇用と年功序列型賃金で、育児休暇は最大3年 ④社員全員が正社員で、希望に応じて70歳定年制 ⑤60歳過ぎでの再雇用制はなく、60代の平社員で年収700万円が数名。また「売上目標」、「営業ノルマ」、「ハウレンソウ」、「成果主義」がないのが大きな特徴。これらが無い理由は、社員



勉強会

を「管理する」のではなく、信じて「仕事をまかせて」いるから。また「常に考える」事を大切にしているから。

二つ目の職場は「第一勧業銀行高田馬場支店」。作家の江上剛氏は第一勧業銀行に入行し、高田馬場支店の支店長に昇格した。そこで実施したのが、「残業なし」宣言だった。これが功を奏して、残業時間が減り、「業績は向上し、最高評価を受け、優秀賞も受賞した」。行員達には、「自分の時間確保」→「残業時間を減らす」→「どうやって減らすか自分で考える」→「業務プロセスを工夫する」→「残業が減り始める」…。このような循環が起きた。ちなみに、江上剛氏の作品には、「銀行支店長、走る」や「翼ふたたび」など銀行や企業で活躍する人を扱ったものが多く、今回のテーマにふさわしい「ザ・ブラック・カンパニー」の作品もある。ぜひ一読されてみてはいかがでしょうか？

最後に「生産性向上」というキーワードから、これら事例も含めて分析され、「働き方改革とは、生産性をあげ、結果として労働時間を短縮すること」と提言されました。

勉強会終了後の午後3時30分から、懇親会は小森田支部長（昭和46年卒）の乾杯で始まり、お互いに旧交を温め話が弾む中、中締めは参加者の最年長であります清水氏（昭和29年卒）の挨拶で終わりました。

次の行事予定として、関西支部総会：平成30年5月19日（土）午後3時より、「ハートンホテル北梅田」にて、講演会講師は、松崎昭氏（昭和41年九州大学



懇親会

工学部卒、前神戸空港ターミナル株式会社代表取締役、元川崎重工業株式会社副社長)

関西支部見学会・懇親会：平成30年11月17日（土）、奈良方面予定

皆さん、是非ご参加ください。お待ちしております。

### 【お問い合わせ先】

公益財団法人 大阪観光局 谷村 信彦

T E L : 06 - 6282 - 5908

E-mail : tanimura-n@octb.jp

.....

### 大阪の観光レポート (No.2)

前回も申し上げましたが、私は現在大阪観光局に勤めています。今回も、同窓会報の紙面をお借りして、関西とくに大阪の観光についてレポートしたいと思います。第2回目は「大阪くらしの今昔館」です。

大阪市立住まいのミュージアム「大阪くらしの今昔館」は、大阪市北区天神橋6丁目にあります。日本人の4倍以上の外国人旅客が訪れます。「大阪くらしの今昔館」は、「住まい」をテーマとした日本初の専門博物館です。高度な学術性を踏まえ、市民の目線に立って歴史を読み解き、見せる展示を超えた「体感する」展示を目的とし、「住まいと暮らし」の情報交流拠点としての集客型ミュージアムを基本理念としています。

ミュージアムの目玉である「なにわ町家の歳時記」は江戸時代の天保期（1830年代）の大坂の町家と町並みを専門家による学術的考証のもとに、伝統的工法を用いて実物大で復元し、家具・調度を置いて当時の暮らしを再現しています。木戸門を入ると、大通りの両側には商家が並び、路地の奥には裏長屋がある。来館者は町の中を自由に散策し、展示史料は原則として自由に手にとって触れることができます。また、音と光によって朝・昼・晩の時間の変化を演出し、屋外のように1日の変化を体験できます。さらに、春から夏までは天神祭のしつらえを再現した「夏祭りの飾り」、秋からは商いの店先の様子を再現した「商家の賑わい」をテーマとした展示となるほか、年中行事や季節ごとに変わる座敷のしつらえを楽しむことができます。また、町家の御座敷などを舞台にして落語や講談、お茶会等のイベントや、子どもを対象としたお手玉作りや折り紙などのワークショップも随時行っています。

特に外国人の方には、会場で着物をレンタルして、江戸の町並みを楽しむ事が大変人気であり、朝9時には、着物レンタルの予約をしてから近所の天神橋



筋商店街で遊んで、再度来館する多くの外国人旅客がおられます。そのお客様の多くは、大阪市営地下鉄・バスと35の大阪施設が無料で入場できる「大阪周遊パス」（1日券2500円、2日券3300円）を持って来られ、ここでの体験をSNSで多数発信し、それを見た外国人が訪問するという好循環で訪問客数が増大しています。

皆さんも是非一度、外国人旅客がそこでどうやって楽しんでいるのか、どこに興味を持っているのか、外国人目線で大阪の観光地を楽しんでいただくのも面白いのではと思います。また、外国人旅客がひきつけられる日本人の知恵、デザインに、もしかする



大阪くらしの今昔館

と新たな商品、サービスのヒントがあるかもしれません。

【関西支部事務局長 谷村 信彦 1991(平成3)年卒】

## 福岡支部

### 1. 九州大学アカデミックフェスティバル2017

#### 探訪記

2017年10月21日（土）、午前10時から16時まで九州大学アカデミックフェスティバルが伊都キャンパスで開催されました。九州大学の今を知ってもらい、同窓生とのつながりを深めようとして始まったお祭りです。経済学部同窓会からも貫会長はじめたくさんの方が参加されました。今年は高校生や地元住民の方々も多く参加されたので、参加人数は去年の倍以上の1700人超にのびりました。

オープニングで久保総長と貫会長がご挨拶。続いて、トークショーではいろいろなことにチャレンジしている若者が登壇。風力発電やジビエの会社、学習塾を在学中に起業した若者、車椅子バスケットに打ち込む女子学生、カブトガニ大好きな女子学生、世界各国に留学した男子学生等々、個性豊かな面々が頼もしい体験談を披露。

そして113番目の元素となるニホニウムを発見された森田浩介教授が登場。新元素発見までの苦労話、



貫会長挨拶

研究者の心構え、学生時代の柔道部の話など、学生や卒業生との対話をまじえながら、大変興味深い貴重な話を語っていただきました。

その後、フォトコンテスト表彰式。2007年芸術工学部卒のNHKニュースキャスターの佐々木理恵さんが司会をされました。表彰された写真は、いずれも懐かしい箱崎や六本松の風景でした。2018年度には伊都キャンパスへの移転が完了します。

12時すぎからは交歓会。歴代総長の挨拶に続き、初井前NHK会長（経済学部1965年卒）も挨拶。交歓会は立食形式。ご馳走がたくさん並んでいました。ちなみに、参加費は無料。交歓会の締めは学生歌「松原に」。「松原に」の作詞者の秋山喜文さん（経済学部1955年卒）にご登壇いただき、皆さんと一緒に声高らかに合唱を楽しみました。

午後はバラエティに富んだプログラム。九大福岡同窓会はミニ講演会を開催。2014年ビジネススクール卒の増本衛さん（トルビズオン社長）はドローン、1982年文学部卒の村山由香里さん（アヴァンティ社長）は女性活躍、そして1970年経済学部卒の森恍次郎さん（如水庵社長）は学生時代を振り返りながら、マルクス、マックス・ウェーバー、ドラッカーについて講演されました。森社長は最後に世界平和を



個性豊かな学生等によるトークショー

願って、椎木講堂に響きわたるような声で歌われました。

会場には九大が開発しているQビーフやソーセージやジビエなどの農産加工品や九大グッズを販売するブースや、地元のショップなどがたくさん並び、買い物を楽しむ方もたくさんいました。

来年も九大アカデミックフェスティバルに大勢の同窓生が足を運ばれるのをお待ちしております。

(文責：福岡支部事務局)

## 2. マルクスとマックス・ウェーバーと ドラッカーと世界平和 (講演要旨)

九州大学アカデミックフェスティバル2017に併せて、九州大学福岡同窓会主催イベントとして「同窓生と在学生の交流会」が開催され、経済学部同窓生の森恍次郎氏がご講演されました。以下は、その講演要旨です。(文責：福岡支部事務局)



(株)如水庵 代表取締役社長

**森 恍次郎氏**

1970(昭和45)年卒

### 1. 自己紹介

私は五十二萬石本舗と如水庵の社長をしております。

五十二萬石本舗は、筑紫もち、季節の大福、最中の黒田五十二萬石等の製造会社で、如水庵は販売会社です。以前は九州大学応援菓「いも九」もつくっていました。

如水庵は、江戸時代の終わり頃、農業を営む傍ら、お菓子づくりを始め、米から水飴をつくり、飴菓子にして博多の街に売りに行っていたのが始まりです。

父親が黒田官兵衛(如水)のような人になって欲しいと、如水公を尊敬していましたので、私は販売会社を如水庵と名付けました。

大学4年生の時に父が亡くなり、社長になりました。その時は年商が7000万円でしたが、今は30億円に。従業員も20数名から360名になりました。博多で生まれて博多で育てられたお菓子屋です。

### 2. 九大教養時代の苦闘

この70年間の人生のなかで、九大の4年間というのは、人生とは何か、どう生きていったらよいか、愛国心とはなにか、正義とは何か等と悩み苦しんだ時期でした。

まず教養部で哲学や社会学を学びました。キルケゴールやニーチェとかを勉強すればするほど、これらの大哲学者が深く悩んでいることがわかって、私

の悩みも一層深くなりました。印象に残ったのは、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、アレクサンダー大王です。4人とも師匠と弟子の関係で、強い師弟の絆に結ばれていました。偉大な師匠をもった人は幸せだな、と思いました。

### 3. マルクスについて

六本松から箱崎キャンパスに移ったら、九大の経済学部はほとんどマルクス経済学でした。カール・マルクスは、人々の不幸の根源は貧困だ、貧困さえなくなれば、個人も家庭も社会も世界も良くなる、戦争さえもなくなるかもしれない、しかし、貧困の原因を明らかにしていないユダヤ教やキリスト教では貧困はなくせない、と結論づけました。マルクスはエンゲルスと一緒にあって貧困をなくす原因を追求して、科学的社会主義を確立しました。貧困の解決策は、生産手段、つまり資本・財産を共同所有することによって資本家と労働者の平等な社会をめざす、と明快に説いています。マルクス、エンゲルスの考えを実践したのがレーニン、スターリン、毛沢東、チェ・ゲバラ、カストロです。

しかし、歴史が証明している通り、共産主義、社会主義は崩壊しました。人間の幸福に貢献する経済体制は、資本が人間を支配する傾向にある資本主義がよいのか。それとも社会が人間を支配する傾向にある共産主義がよいのか。後者はすでに失敗しました。これからの理想の体制は、資本にも社会にも支配されたり、抑圧されたりしない、根本に人間を据えた人間主義の経済体制の構築ではないかと思いません。

### 4. 家業承継について

私の学生時代に、ベトナム戦争や水俣病が起きました。人間はどうしてもエゴを乗り越えられない。なぜいがいみあうのか。人間不信に陥りました。人生に希望を見いだせずにいた時、アーノルド・トインビーやH.G.ウェルズの本を読み、地獄で仏にあったような気持になりました。人類の滅亡をくい止めるためには世界連邦政府をつくるしかない。そう思って国連に入ろうと思いました。しかし、教授に相談したら、「君には無理だ。法学部に入り直して外交官試験に合格しなければならないからだ」と諭されました。しかし、お菓子屋は小さいとはいえ民衆を搾取するプチブルジョアだから継ぎたくない。

その時、一条の光が射しました。私は古代史が好きだった。日本書紀のなかで、神武天皇は「全国の民に甘いおいしい水無飴をなめさせたい。水無飴を食べれば、くつろぐし、やすらぐし、豊かな心よ

びおこさせる。武器を使わずにこの甘い飴でいい国を作りたい」と言った。これを読んで、「私はお菓子で家庭の平和と世界の平和に貢献することができるかもしれない」と、家業を継ぐ決心をしました。

### 5. マックス・ウェーバーについて

マックス・ウェーバーは、資本主義が発展した原動力は、働いて貯めることにありと言いました。自分の仕事に専念して誇りをもつことが確実に高い生産性をもたらす、人類社会は品質の高い商品が低価格で誰にでも手に入る時代にむかって発展していくと考えました。宗教倫理から生み出された生活合理化という唯心論です。一方、マルクスは、宗教は上部構造であって下部構造に規定されるという唯物論です。どちらが正しいのでしょうか。私は、マックス・ウェーバーの唯心論もマルクスの唯物論もどちらも間違いだと思います。なぜなら人間の生命も肉体と精神は一体で、身体と心は別々に分けられないからです。

### 6. ドラッカーについて

ドラッカーは会社の使命は需要の創造と雇用の創造と納税の義務だと主張しました。需要の創造とは、喜んで買ってもらう商品を開発すること。すなわち、お客様に喜びと感動を与えることができれば、売上があがる。そうなるに従業員を雇わねばならない。雇用の創造になる。社員に成長と幸福をもたらす。そして企業の3番目の使命として税金を払う、ということになります。

### 7. おわりに

マルクスの理想は貧困をなくすことでした。マックス・ウェーバーの理想は誰でも安く最高品質の商品やサービスが手に入る社会でした。ドラッカーは理想的な企業によって人々の成長と幸福をもたらされると考えました。しかし、マルクスやウェーバーやドラッカーの理想が実現しても、戦争が起きれば一瞬ですべてが破壊されます。戦争は最悪の人権無視です。経済学も政治学も外交も自然科学も芸術も文化も宗教もすべてが「平和」という一点をめざして協力すべきだと思います。それでは、世界平和へ祈りを込めて、谷村新司の「群青」を歌います。

前奏曲ナレーション「戦争ほど残酷なものはない。戦争ほど悲惨なものはない。昭和20年、3,000名の若者たちが、戦艦大和と共に、東シナ海の沖で、海の藻くずとなって、死んでいきました」

空を染めてゆく この雪が静かに  
海に積もりて 波を凍らせる

空を染めてゆく この雪が静かに  
海を眠らせて 貴方を眠らせる

・・・  
・・・

空をそめてゆく この雪が静かに  
海を眠らせて 貴方を眠らせる

最後のナレーション「平和ほど尊きものはない。平和ほど幸福なものはない。平和こそ人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」

## 3. 福岡支部交流ゴルフ会、第63回コンペを開催！ ～ 11月12日(日) 伊都ゴルフ倶楽部



三菱電機(株)九州支社  
副支社長

折田 博之氏

1985(昭和60)年卒

皆さま、こんにちは！

11月12日(日)に開催された第63回交流ゴルフ会にて、優勝させて頂きました折田(S60年卒、1年留年組)です。

当日は、好天に恵まれ、ご同伴頂いたメンバー(平田俊次様・S56年卒、岡島充亦様・S59年卒、萩野裕司様・H14年卒)の方々と楽しくプレイできたおかげです。この場を借りまして、改めてご同伴メンバーの方々に感謝申し上げます。

今回のコンペには67名の方々がご参加され、過去最大規模とお聞きしました。私個人は、本コンペの参加は3回目でしたので、優勝してしまった事を申し訳なく思っております。

グロス(94)の出来としては、個人的には「やや不満」ながら、OBや4パット等でトリプルボギーを叩いた3ホールが全て隠しホールに当たり、ハンデが24も付いたのが勝因と考えております。今年のゴルフのツキを全て使い切った感じです。

さて、私は、三菱電機(株)九州支社に勤務しておりますが、入社以来札幌、東京勤務を経て2007年に福岡にようやく戻ってきました。福岡生活も11年目を迎え、定年を間近に控えた現在、このまま福岡に留まれるか戦々恐々の日々を過ごしております。来年も、九州圏内にいられたら、次回も本会に是非とも参加したいと思っておりますので、よろしく願います。

最後に、九州大学経済学部同窓会福岡支部の益々の盛況と同窓会メンバーの方々の方々の今後のご活躍とご



健勝を祈念して、優勝コメントの挨拶とさせていただきます。ありがとうございました！

(4月1日付にて三菱電機プラントエンジニアリング(株)へ出向)

#### 4. 福岡支部 平成29年忘年会を開催

(株)西日本シティ銀行

白須 浩司氏 1984(昭和59)年卒

平成29年12月11日、八仙閣本店で開催されました九州大学経済学部同窓会福岡支部の忘年会におきまして、幸運にも「同窓会賞」を頂戴しました白須(S59年卒)です。大盛会となりました当日の模様をお伝えします。

初めて忘年会に参加させて頂きましたが、100名を超える参加者であることに驚きました。八仙閣さんの美味しい料理を堪能しながら、多くの先輩・後輩・同級生と過ごすひとときは、とても充実した時間でした。

忘年会の目玉企画である大抽選会では、九州電力様、西部ガス様、西日本鉄道様といった各企業から、豪華賞品が協賛として提供されました。抽選番号が読み上げられる度に、各テーブルでは一喜一憂の盛り上がりが見られ、会場全体がまるでコンサート会場のような熱気で包まれていました。私自身、くじ運は悪い方ですが、豪華賞品を頂戴することができて、良い家族孝行となりました。

忘年会の最後には、全員で「松原に」を熱唱し、大盛況裡に終了となりました。

同窓会は、年代は違うものの、同じ学び舎で青春時代を過ごした人々が、時間と話題を共有し、共感し、協調できることが一番の醍醐味だと思います。来年の忘年会にも参加したいと考えています。

最後になりましたが、忘年会の幹事役を務めていただいた西部ガス関係者の皆様、特に名司会で会場を爆笑の渦とさせていただいた末次隆様(H2年卒)



貴会長と白須浩司氏(左)

に厚く御礼を申し上げます。

#### 5. お知らせ

##### (1) 平成30年度 全国・福岡支部合同総会のご案内

福岡支部では総会・特別講演会・懇親会を下記の通り開催いたします。万障お繰り合わせの上、奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時 平成30年6月8日(金) 18:00～20:30

場所 ホテルオークラ福岡 8F

(福岡市博多区下川端町3-2)

TEL (092) 262-1111)

##### (2) 第64回交流ゴルフ会のご案内

福岡支部では、恒例の標記交流ゴルフ会を下記の通り開催します。ご友人等お誘いあわせのうえ、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時 平成30年5月13日(日)

第1組7:50スタート

場所 伊都ゴルフ倶楽部

糸島市香力474 TEL (092) 322-5031

※メール、郵送、同窓会のホームページなどのご案内していますが、本会報をみて参加を希望される方は、下記事務局までご一報ください。

〈お問い合わせ先〉福岡支部事務局 高木、国生

公益財団法人九州経済調査協会 内

TEL (092) 721-4900

E-mail soumu-02@kerc.or.jp

##### (3) Facebookページ発足のお知らせと登録のお願い

このたび福岡支部では下記URLにFacebookページを発足いたしました。

<https://www.facebook.com/KUEAF/>

このページでは登録された皆様にサロン会、ゴルフ交流会、忘年会、総会等の各種イベントや、同窓生の近況報告など、様々なお知らせを掲載してまいります。登録の仕方は、以下の2ステップです。

##### ①福岡支部のFacebookページを開く

<https://www.facebook.com/KUEAF/> にアクセス、または添付のQRコード

##### ②「いいね！」をクリック

PCではページ中段左側、スマートフォンでは左下にあります。

(上部写真の下にあります)



このページを読まれた方が【いいね!】を押したり【シェア】をしていただくことによって、より多くの同窓生につながっていくきっかけとなります。このページを基点にして、新たな出会いや昔の仲間との再会があれば何よりです。

# 一読千金

## 『IFRS 適用のエフェクト研究』

九州大学大学院経済学研究院・准教授

小津 稚加子氏



このたび、「一読千金」に執筆する機会をいただき、光栄に存じております。2017年7月に東京支部総会で、同窓会の皆様のご活躍を間近で伺うことができ、とても楽しい

時間を過ごしました。ありがとうございました。

私は、2004（平成16）年に九州大学に着任致しました。着任してすぐに、福岡支部総会で何か話してみないかとお誘いをいただきました。国際企業分析講座で国際会計を担当していることもあり、国際会計基準を取り上げました。報告を終えて、「やれやれ」と思ったのも束の間、直ちに専門的な質問をいただき、経済学部の同窓会は勉強熱心だなあと、感心したのを覚えています。

\*

さて、本題に入りましょう。2017年8月に、『IFRS 適用のエフェクト研究』（編著）を出版いたしました。会計基準の設定問題をIFRS（国際財務報告基準）の適用とそのエフェクト（effect；効果、影響）という思考のもとで多角的にアプローチしたものです。

IFRSはEUとオーストラリア、ニュージーランド、そして台湾などアジア諸国が日本に先駆けて導入しました。日本では、IFRSに徐々に統合化していくコンバージェンスという方針を採り、そしてその作業を加速度的に進めるという「東京合意」が締結されましたが、実際の企業の行動は慎重でした。つまり、日本における2012年頃までのIFRS適用は上場企業の一部に限られ、適用企業数は決して多くありませんでした。

しかし近年、状況は一変し、ここ数年にいたっては、着実にIFRS適用企業が増えています。このような状況において、本書はIFRS適用のエフェクトをどのように捉え、考えていったらよいかを複数の研究方法、研究主題をもちいて論じています。IFRSの導入と適用という出来事が与えた変化を整理し、それが近未来にどのような研究課題を残すの

かを共通の問題意識にしつつ、現時点で確認できる事実をまとめ、知見を書き留めるという目的で編集いたしました。

本書の構成を紹介します。次のとおりです。

序章 なぜエフェクト研究に取り組むのか

第1編：概念・理論研究

第1章 IFRS適用に伴うエフェクトに関する諸概念

第2章 IASBによる正統性の追求

第3章 IFRSと会計の機能

第4章 会計基準設定と適用後レビュー

第2編：IFRS適用の効果・影響分析

第5章 EUにおけるIFRSの

エンドースメント・メカニズムの意義

第6章 IASBデュー・プロセスにおける会計基準設定主体の行動

第7章 会計基準設定主体の戦略と会計研究

第8章 中小企業向けIFRSに対する

オーストラリアの選択

第9章 台湾におけるIFRSの導入戦略

第10章 わが国上場企業におけるIFRS適用に関する事前エフェクト分析

第11章 IFRS適用の影響に関するCFOアンケートの因子分析とクラスタ分析

第12章 IFRSの日本の税務への影響

先行適用国に対してはIFRS適用の事後評価、日本に関しては事前評価という視点でまとめました。そして、全体を通して次のような知見が得られました。

- 日本企業にとって、IFRS適用前におけるコスト感は強く、その後もIFRSへの消極的な態度が完全にぬぐえたわけではないが、積極的な兆しが見え始めている。追加的な分析によると、製造業がIFRS適用に消極的であったという結果は得られなかった。

- IFRS先行適用国の例からIFRS適用のベネフィットが確認できるならば、日本との経済的環境の相違を勘案したうえでそうした国の調査研究を続け、日本にとって有意義な要因を抽出すべきである。

- 中小企業へのIFRSの影響は制度的実態の観察のみならず、受入が円滑に進まない要因と問題点を社会経済的背景も含めて検討の俎上に載せる必要がある。

- IFRS適用の波及効果は会計基準開発に留まる

ものではないので、エンドースメント・メカニズムや研究者コミュニティとのネットワークをも視野に入れた方向性を見据えるべきである。

\*

本書は、14名の執筆者、翻訳者の方々との共同研究です。経済学部の卒業生の岡田裕正教授（長崎大学経済学部長）や大迫俊輔さん（小野廣隆研究室出身、経済工学専攻）が加わってくださり、研究手法も視点も多角的になりました。また現教員の潮崎智美准教授も章担当をしてくださり、海外からは九州大学との提携校であるシドニー大学の研究者も参加されています。このようにベテランから気鋭の方々までのお陰で結実しました。

共同研究にしたのは、IFRS適用の影響が、先行適用した国・地域に限っても広範で、その実態を踏まえて将来日本企業や会計基準設定にどのような変化があるのか、推測するのは容易ではない、と思ったからです。そこで、ひとりで研究するのではなく、チームで取り組めばパズルをひとつひとつ埋めるように論点が判ってくるだろうと考えたからです。そしてこの考え方は功を奏したと思います。

最後に、同窓会の皆様にお伝えしたいことがあります。本書の10章と11章では、日本の上場企業のCFO/財務担当取締役の意識調査にもとづいた分析を行いました。卒業生の皆様のなかには、経理部・財務部でご活躍の先輩も多いのでしょうか。アンケー



ト調査に回答して下さった方もおられ、調査票の自由記述欄に「経済学部の卒業生です。〇〇先生のゼミでした。」「△年度の卒業です。」というメッセージを見つけました。ご協力と励ましの言葉をくださったことに感謝申し上げます。

本書はタイトルにある「エフェクト」に因み、波及効果を表現するデザインに仕上げました。ページの下地に「和」をイメージする朱色で彩を添えています。「一読千金」はモノクロなので再現することができません。ぜひ書店にて、本書を手にとっていただければうれしいです。

(2017年10月24日脱稿)

## リレー随想

### 学生歌『松原に』をめぐって



熊本県立大学名誉教授  
**秋山 喜文氏**  
1955(昭和30)年卒

昨年暮、久保総長から連絡を受け、「自分は入学以来学生歌『松原に』を歌って来たが、作詞家がまだ生きておられるとは知らなかった。是非一度会いたい」とお申し出があり、喜んで自宅近くの国立博物館応接室

でお会いすることになった。数名のスタッフとともにお話ししたのだが、久しぶりに愉快的時間を過ごすことができた。

学生歌『松原に』が制定されたのは、昭和30年3月の卒業時予餞会でのことだから、制定後もう60年以上も経ったことになる。その間ずっと、各地区同窓会などで歌い続けられてきたわけで、これは作詞家にとっては、本当に名誉なことだと思っている。

学生歌は、もともと、九大には校歌がなく、やはり校歌があった方がいいので、まず学生歌を数編選び、その中から校歌を選定しようという構想で募集が始められたものである。もちろん学内で学生から公募し、教授などを中心とした選考委員会で選考し、制定する。それを数回続けて、その中から「校歌」を決定しようというわけである。『松原に』はその第1回の学生歌であった。その時は2編選定された。もう1編は『聳えて高き』で、寮歌風の長い歌であった。その後、数編の学生歌が選定されているが、そ





卒業式のあと、気の合った仲間が集まり、氣勢を上げた時の写真。その後、皆バラバラに散り、各人第一線で活躍したが、今はどうしているか。皆85歳を超え、危ない年齢になっている。(筆者は左から3人目の、背の低い男)

の中でもやはり一番歌われているのは『松原に』のようである。各地区の同窓会などでも、最後に歌われている。

『松原に』がこれだけ長く歌い継がれてきたのは、やはり曲がいいからである。実に歌いやすい。歌が下手な人でも、気軽に大声で、元気一杯歌える。作曲者は山田尚慶さん、当時工学部3年の学生で、曲も公募の結果、この曲が採用されたのである。こういう歌いやすい学生歌が制定されたから、60数年も歌い継がれて来たのだ。しかし聞くとよければ、作曲者の山田さんは既に他界されているようで、全然知らなかった。山田さんは私の1級下になるが、私が既に85歳で、回りもだんだん淋しくなりつつあるので、やむをえないことかもしれないが残念なことであった。

少し『松原に』のことに触れたい。『松原に』は、九大が立地する、博多湾沿いの松原や元寇防塁、太宰府の梅林などを想定し、そこで学ぶ学生の、正義感・知性・情熱、そういうものを三つの節の歌詞に込めている。一般的にこういう歌は、「自由を守れ」「知性を磨け」というような「他律的」な歌詞が多いが、『松原に』は、われわれ自身が「自由を守る」「知性を磨く」「情熱を焚く」と、いわば「自律的」であることを強調している。そこに九大学生の「心意気」を込めたかったのである。

なお、第二節の歌詞の冒頭に、「唇も朽ちはてて黒き蛾は群れ舞うも」という表現があり、少し俗っぽくて、校歌としての品格に欠けるのではないか、という悪口もあるが、これは象徴的に書くことによって、ナマの刺激を避けようとしたもので、たとえば悪徳政治家などが、口ではいいことばかり言っ

て、裏では黒い「カネ」を動かしたりしている事例が再三報道されるようなことを、詩的に表現したもので、語頭に「ク」の音を多用する「アリタレーション」(alliteration) (頭韻) という詩の技法を一部取り入れた表現である。

去る10月21日の「アカデミックフェスティバル2017 ホームカミングデー」では、久保総長のご推薦もあったのか、昼のパーティーの最後の学生歌斉唱の折に、「作詞者が来ているから」ということで、私は壇上に招かれ、マイクの前で一言挨拶したあと、皆と一緒に『松原に』を合唱した。私はこれが制定された頃はコールアカデミーのメンバーで、セカンドテナーで頑張っていたので、当時を思い出し、マイクの前で力一杯歌った。最近に無い、幸せの一瞬だった。

今、九大は、他に例を見ない「共創学部」の創設を初め、いろんな面で大きく変わろうとしている。今からの九大の学生諸君が、この歌に込められた精神を引き継いで、さらに大きく「世界」へ、あるいはもっと大きく「宇宙」へと羽ばたいて行くことを祈っている。



アカデミックフェスティバル2017ホームカミングデーにて  
右から貴福岡同窓会会長、久保総長、筆者、杉東京同窓会事務局長

## リレー随想

# 「九大どげん会」100回記念 大会に寄せて!



「九大どげん会」100回記念大会幹事  
九州ステンレス流通協会・  
九州軽金属商協会 事務局長

田中 健二氏  
1965(昭和40)年卒

我々の「九大どげん会」は、昭和40年に九大経済学部を卒業した有志の者達で結成された同窓会である。

さかのぼること、今から24年前の平成5年当時の九大経済学部同窓会の二次会で、高田君、帆足君、松井君の3人で、将来福岡に帰ってくる同期の仲間の憩いの場を作ろうとスタートしたと聞いている。会の「どげん

会」の名前のいわれは、皆さん「どうしておられますか？」を博多弁に直すと「どげんしよんしゃあとかいなあ〜」から短くして「どげん会」となった。

約25年経って100回は区切りの良い回数で、早々に幹事が五十音順の輪番性で順送りにされていたので、夕行の田中に回ってきて、通常は一人幹事であるが、特別に100回ということでもう一人の田中知博君にも幹事になって貰い、二人で1年近く掛けて企画した。例年「どげん会」は三ヶ月毎に年4回、第3金曜日の夕方に開催されており、秋は11月の開催が恒例となっておりますが、特別に10月に開催された「九大アカデミックフェスティバル（旧ホームカミングデー）2017」に便乗して、伊都キャンパスに行ったことのないという仲間も多かったので、10月21日（土）に100回記念大会をその行事に合わせて開催することになった次第だ。

“九大の「今」を楽しく知って貰う一日”というキャッチフレーズのアカデミックフェスティバル。我々も卒業して50年以上が経ちすっかり爺さんとなり、悠悠自適はおろか、それなりに弱った身体と家庭環境に悪戦苦闘しながらの生活に、わが母校の新しい姿と若い学生、それ以上に昔の仲間に触れ合うことが心の拠り所となり元気を貰う機会になったのではないだろうか？

当日は嬉しいことに100回記念大会だからということで、県外の関東から2名、名古屋から1名、関西から1名と4人、それに我が「どげん会」の紅一点のマドンナ役の経済学部同窓会事務局の藤原さんを加えて総勢15名が、ここ伊都キャンパスに集結した。

椎木講堂の入口に正午前から手製の「どげん会」ののぼりの旗を持った田中知博幹事を目掛けて三々五々集まり、先ず椎木講堂1階のギャラリーで開催された「交歓会」の冒頭に九大久保総長挨拶の後、数々の話題を提供した前NHK会長だった我らの仲間の



どげん会（2017年10月21日）

初井君の挨拶も真剣に聞かず、食べながら飲みながらお互いの情報交換に余念がなかった。

次に楽しい伊都キャンパスの5コースに分かれたバスツアー、これが大変な人気で、当日の朝からの参加者個人の申し込みしか受付られず、幹事としては世界に誇る九大の最先端技術の“水素エネルギー”や“有機光エレクトロニクス”等のツアーと周遊ツアーの二本立てを計画していたが、朝から地域の方々等の申し込みで既に満杯となり、止む無く臨時便の出た伊都キャンパス周遊ツアーの3台のバスに各々分乗し、大学としては日本一を誇る広大な敷地の伊都キャンパス内を、人間環境学府の若い教授のガイドにより、既存の建物や現在建築工事中の農学系・文系の建物等を見学した。台風21号の影響でも雨は幸い降らなかったが、海からの冷たい風が強く寒い中でのバスツアーであった。医学部を除いて、今年で箱崎地区から完全に移転するとかで、世界に誇る大いに躍進が期待出来る我らの母校の姿を目の前にして大変感動した。

締めは椎木講堂2階にあるイタリア料理店「ITRITO」（イトリーイト）での懇親会、成光代表のご好意で貸し切り状態の早めのスタートが出来、早速の温かい料理に寒さをカバーし、一息入れることが出来、非常に助かった。

懇親会の冒頭に身内の法事で残念ながら欠席となった我が「どげん会」の会長の青木君からのメッセージが配布され、高田事務局長から口頭で読み上げられた。

「九大どげん会」100回記念大会、おめでとうございます。平成5年に発足して以来、24年目で迎えた節目であり、ご同慶の至りです。改めて高田事務局長を初め会員各位に敬意を表したいと思います。

尚、ご参考までに200回記念を迎えるとき、我々は計算上100歳に達しています。今後とも、我々

が共に過ごした青春の証として、又、明日への活力源として「どげん会」が末永く継続されることを願っております。本日は誠にありがとうございます。

そうですね、我々後期高齢者世代として、青春時代の証として、又、明日への活力源として、この「どげん会」を皆の健康寿命を延ばすのに役立てて貰いたいものだ。

毎回であるが、懇親会最後のハイライトは、1時間掛けての参加者全員の各自の近況報告会である。ひと頃は孫や親の介護等が中心であったが、最近は自分自身の話題が多くなったような気がする。まずは自身の健康についての話題、地域活動、シルバー大学、旅行、スポーツや趣味の会、中にはサ行で頑張っている仲間もいる。つまり、サ…裁縫、シ…躰(女房からしつけられている?)、ス…炊事、セ…洗濯、ソ…掃除、何のことはない、主婦→主夫に代わっているだけであるが、これがなかなかの家庭円満の秘訣とか…、他の仲間の何人かは是非見習いたいとか…、中には、女房や子供さんを亡くした仲間もいて、どうか奥さんを大切に、家族の元気な幸せをかみしめて欲しいと…

2時間の懇親会はあっという間に過ぎた。次回の2018年2月16日の101回目の担当幹事が発表され、青木会長からの伝言の100歳の200回目を目指して踏み出した。名残を惜しんで、特に遠く県外からの参加者への今回の熱い思いに感謝し、元気でまたの再会を約束し、皆で記念集合写真を撮って、九大伊都キャンパスにしばしの別れを告げ、三々五々とそれぞれの地へ思い出を胸に帰路についた。

私は、ステンレス一筋の丸紅を退職した後も、長年お世話になったステンレス業界へのご恩返しとして、九州ステンレス流通協会の事務局長として、業界の健全な発展の為の裏方として微力ながら現在も頑張っている。思いおこせば、昭和40年に丸紅に入社して以来50年以上に渡り、魅力的なステンレスに携わらして頂き、感無量の気持ちだ。

それ以外に、世のため人のためにお役に立ちたいと社会福祉関係の仕事をして頂いている。全国的に障がい者のうち「身体障がい者」と「知的障がい者」の数が横這いから減少傾向にある中、年々増加傾向にある「精神障がい者」、その精神障がい者でも普通に働き、親亡き後もいつもの地域でいつものように暮らしたいという強い願望に答えるべく、精神障がい者の為の就労支援員として、就職のお世話と、



その為の研修等に携わって精神障がい者の自立支援のお手伝いをさせて頂いている。経済学部同窓会を通じ九大図書館で不要になった英字新聞を分けて頂き、それで精神障がい者の方々がペーパーバックを手作りで制作し、その中に手作りの焼き菓子を入れて販売することもしている。写真は、福岡県庁地下売店の「まごころ製品ショップ」で販売しているそのペーパーバックを撮ったもので、向かって右端が筆者。

## リレー随想

# ファントムの夏と 経済学部の残影

下関市立大学名誉教授

**堀内 隆治氏**

1965(昭和40)年卒・1967(昭和42)年博士入

九大工学部で建築中の建物に米軍ファントム機が墜落・炎上して50年目の夏を迎える。1968年6月2





日深夜の事である。昨年は50周年記念プレシンプジウムに参加、本年6月予定の記念誌出版と記念集会を仲間と企画し、準備を進めている。関連資料を読み、当時の状況を思い出している。

私は1961年に経済学部に入學したが、文化サークルの弁証法研究会に入部、『資本論』輪読をするうちに学生運動に関わることとなった。その後、学生運動内部の対立（党派闘争）に疑問を抱き、誘われて生協運動に参加、「生活の協同化」（正田誠一理事長：経済学部教授）に希望を託した。しかし、マルクスと生協の間で彷徨う日々の中で卒業年を迎え、モラトリアムとして大学院入学となった。

大学院では生協の縁もあり、正田研究室に属し、『資本論』をひたすら読んでいた。すぐに修士課程2年間で過ぎ、『資本論』とくに労働価値論に決着が付かぬまま、ともあれ社会政策関係の修士論文を書き、博士課程に進学した。相談した木下悦二先生からは「まあ、そう気張らんで、書いて出しときなさい」と励まされた。

博士課程進学が1967年、時は激動へと向かいつつあった。ベトナム戦争の時代、秋には佐藤首相のベトナム訪問を阻止しようと羽田弁天橋での闘争渦中、京大生山崎博昭が虐殺された。翌年、佐世保への米原潜エンタープライズ寄港阻止の全学連行動があり、九大教養部が出撃拠点となった。

1968年初頭、深い霧の中で私は佐世保へと一人向かった。ともあれ状況を見たかった。デモ隊に参加もせず、激しい行動と催涙ガスのなかで私は立ち尽くした。私の中で何かが蠢いた。同じ世代に同じ情感が生まれたのだろう。佐世保が終わり、どこからか反戦団体をつくろうとの声が聞こえた。友人の誘いに乗り、4月、結成に参加した。九大反戦青年委員会の誕生である。

エンプラから九大反戦へ、私の状況への関与が始まった。直後には米軍山田弾薬庫（小倉）からの輸送列車を阻止する座り込み闘争に反戦部隊として参加、戦争の被害者ではなくベトナム戦争に加担した日本・日本人の現場を痛感した。その直後、沖縄嘉手納基地所属（板付基地配属）のファントムが墜落した。墜落は偶然である。しかし、一挙に板付基地撤去へと運動が盛り上がったのは必然である。

『資本論』を読み続けたものの、エンブラー反戦ファントムで勉強どころでなくなった。結局、社会政策論をまともに勉強せず、思いつくままに初期マルクスや学部木下ゼミで学んだ宇野理論さらに滝沢克己論文を読み散らした。以下、1968年夏から

1970年夏までの残像を記す。

1967年7月9日、評議会は「ファントム機体は自主的に引き降ろす」とのいわゆる7・9決定を行い、「全学的合意」をめぐる九大全体を巻き込む「機体闘争」、大学自治問題が始まった。九大反戦は「引き降ろし強行反対」、「機体撤収拒否を宣言せよ」、「全学集会を開催せよ」と主張し、評議会と対峙、私は、評議会の一員である正田先生、木下先生とも「大衆団交」の席上で向かい合う時があった。

私は、1968年夏以降、工学部本館一階、応用理学のK研究室にすることが多く、経済大学院で勉強した記憶が薄い。大学院の後輩Kさんが、部屋の壁に激烈な教授会批判のビラを貼ったのが印象に残っている。中国文革の大字報のごときであった。だが、九大反戦の事で正田・木下両先生その他教授会から何らかの指摘や関与を受けけたことは全くない。きわめてクールな付き合いだった。もちろん賛同も激励もなかった。

1968年のいつか不明だが、法文系食堂の前で近江谷左馬之介先生（修士時代、後輩のIさんと二人で演習を履修）からハンドマイク越しに「堀内はデマゴグである」と批判されたことも、甘辛い思い出である。時期は忘れたが、正田研究室の合宿勉強会が若松の公共の宿で行われた。学外からの先輩諸氏の参加もあった。資本論、主体性論、宇野理論、滝沢思想の間をさまよっていた私は、商品生産と商品流通に関する抽象的な報告を行った。正田先生から不機嫌な声で「アダム・スミスから読み直しなさい」と指摘された。その晩、寝る前に先輩諸氏から「あまり気にするな」と励まされた。みな良い人だな、と感じ入ったのを覚えている。結局、マルクス価値論に関して、何一つ核心がつかめぬまま博士課程を中途退学した。

九大反戦の運動に熱中しながら、経済学部の先生方とはクールな関係だったと記した。にもかかわらず「闘争」の渦中で就職のお世話になった。ファントム期、荒牧正憲先生から高木暢哉先生からのお話だと某私大の紹介を受けた。未だ、その気にならず私の方からお断りした。70年、大学院退学前後、木下先生から某市大、正田先生から某国立大の紹介を受け応募したが落選した。大学院を退学し、九大助手となったものの、大学以外の将来も考え始めた折、下関市大への推薦を受けた。下関市大教授（経済大学院OB）A先生のお訪ねがあり、「いまの時代に論文を書けるような人は要らない」とまで言われ、妙に感銘を受け、下関への赴任が決まった（事実、ま

ともな論文は一本もなかった)。

実は、1965年、大学院の試験に合格し、研究室を決める時、正田先生から言われた。「私のところは君と傾向が違うがよいか」と。それでも生協の縁、筑豊炭鉱調査などへの尊敬から正田研究室を選んだ。同室の同期院生はNさん(元佐賀大・九州国際大教授)等二人。後日、Nさんとは社会政策学会で励まし合った。「違うが」と言われた点はそうであったが、「いじめ」「村八分」に逢うことなく穏やかな日々を過ごした。違った考えを持った人々と言葉を交わすよい経験になった。

エンプラからファントム・大学立法闘争へと私の人生が急展開した時代、大学入学以来の混迷と向き合い、学部を超えた先輩・同輩・後輩に恵まれ、経済学部の恩情にも包まれて、生きる根拠を模索できた時代であった。

## リレー随想

# 学生時代の思い出



キャピタル・パートナーズ証券株式会社  
代表取締役社長兼CEO  
一般財団法人 日本・ベトナム  
文化交流協会 理事長

**筒井 豊春氏**

1974(昭和49)年卒

数多の先輩諸兄を差し置いて甚だ僭越ですが、後輩の学生諸君のために学生時代の思い出を綴ります。入学は1970年4月。下火とはいえ学園紛争の名残がありクラスの中には頻繁にデモに参加する同級生もいました。当時は入学金10,000円、月謝1,000円、田島寮費500円、特別奨学金8,000円。貧乏学生の典型でした。生活資金のためにアルバイトに明け暮れました。デモなんかには現(うつつ)を抜かず経済的余裕など全くなかったのです。姉は京都第二日赤高等看護学校に進学。そこは学費や生活費は不要。長男の意地にかけて母に負担をかけたくなかったので「国立は金がかからない。奨学金で十分だ。」と

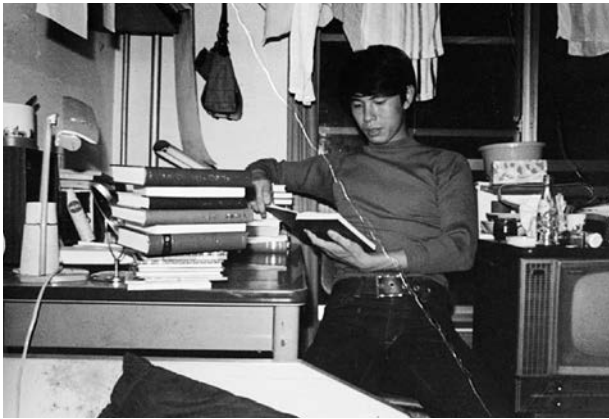
嘘について福岡に出て来ました。その点で田島寮や松原寮は天国でした。午後8時頃になると週末のアルバイトの放送が流れます。建築現場や築港などの肉体労働が多かったと思います。条件の良いバイトは寮生が脱兎の如く殺到します。高校の3年秋まで一人で百姓をやっていたので肉体労働は全く苦になりません。金が無くなればバイトに精を出すという気楽な学生生活でした。恵まれた身分の学生が“革命だ!”“帝国主義打倒”など所詮「戯言」と学生運動を冷めた目で見ていた気がします。

小学生の頃は新聞少年でした。唯一日経新聞を購読していた村のお金持ちの秋吉さんに日経新聞の数字欄は何かと尋ねました。初めて株価を知った瞬間でした。小学5年生の頃、姉に貰った赤いペンパルの古本で無謀にもドイツの女の子と文通を始めました。同封された感謝祭のパレードの写真をみるととても可愛い子でした。勿論英語など全く分かりません。ペンパル本の文章を組み合わせて、後は色鉛筆で絵を描いて送りました。1年以上文通が続きましたが彼女が進学するので文通を止めるという通知が来ました。失恋したような気分になり落ち込みました。死ぬまでに一度でも彼女に会いにドイツへ行こうと心に誓いました。

大学の2年になるとバイトで資金に余裕が出て日経新聞の購読を始めます。恐らく田島寮で私だけだったかも。入学してからドイツに行くために英会話の勉強をすることも決めていました。タダで勉強する方法がないかと考えていると、教養部の校門でモルモン教の外人から「毎週日曜日にミサがあるから参加しないか」と誘われました。渡りに船とばかりに動物園の近くにあった教会通いが始まりました。しかし、数回参加しても洗礼を受けようとしなない私は「もう来る必要はない」と神父さんを怒らせ、タ



木下教授と。教授の後ろが筆者



部屋で学習中

ダの英会話学校は3カ月程で退学となりました。その後、亭々舎のコンパの二次会の時、中洲で板付基地のG Iを見かけ酔った勢いで話しかけました。それから頻りに土曜日の中洲に出掛け、安酒で粘りながらG Iと英会話の練習を続けました。若いアメリカ兵相手に片言の英語で通じましたが、スラングには閉口しました。5年後にペンシルベニア大のウォートン経営大学院に留学しました。週末はパブによく飲みに出掛けましたが、中洲のG Iとのスラング英語の経験が大いに役立ちました。

箱崎に進むと松原寮に入りました。日経の影響でしょうか、3年生では近経の理論経済学の武野ゼミを選びました。4年生になると就職も野村證券で決まっていたので、国際経済論の木下ゼミの門を叩きました。先生は基本的には3年生からしか受け付けられない方針でしたが、私の粘り勝ちで4年生ながら3年生のゼミに入れて頂きました。3年生と一緒に九重山での合宿が懐かしく思い出されます。卒業直前の3月に私のために卒論発表会を企画して頂き、その夜は3年生と中洲で宴席を設けて頂きました。卒業してからも、木下先生には結婚式でご祝辞を頂き、また学会で上京の折にはお食事をご一緒させて頂きました。夏休みに帰省の折には香椎のご自宅にも何度かお邪魔させて頂きました。昨年、心ばかりのお中元をお送りしたところ、96歳で国際経済の勉強をされておられるとのお葉書を頂戴しました。恩師の健康長寿を心から嬉しく思います。

大学時代は日経新聞が毎朝新聞受けに「コトツ」と落ちる音で目覚める習慣が付きましました。毎日株欄欄を読んでいるうちに証券に次第に興味を湧いて来ましました。子供の頃の夢は、死ぬまでに一度だけでもドイツに行くこと。そこで当時留学制度が充実していた証券会社の野村證券と大和証券の就職試験を受けました。運よく両社とも合格しましたが、結果的に業界トップの野村證券を選びました。

大学4年の夏休みに、長銀に内定していた法学部の親友のT君に声を掛け、日産座間工場の夏季アルバイトのために急行「桜島」で上京しました。1ヶ月余りの昼夜交替の工場での単調労働はまさにチャップリン映画の世界でした。今では貴重な経験だったと思います。九州に戻る前に野村證券の人事担当者に電話すると、「すぐに本社に顔を出せ」と言われ日本橋まで出掛けました。そこから小綺麗な鉄板焼き店に連れて行かれました。その時ご馳走になったサイコロ・ステーキの味は今でも忘れられません。食事をしながら、野村で留学試験に合格するコツをお聞きしたところ、語学力は必須だが最初の支店での営業成績が肝心だご指導を頂きました。

東京から九州の実家に戻った8月下旬、ふと手にした新聞にリクルート福岡支店の営業職アルバイトの募集広告を見つけました。野村の人事担当者の話を思い出して、早速応募して9月から12月末まで営業職のアルバイトを経験しました。所長の幸田昌則氏は九大の法学部の先輩。1ヶ月ほどするとコツを覚え、10月以降営業所内成績トップを続け、度々金一封の月間表彰を受けました。幸田所長から「一度東京で江副さんに会って見ないか」と誘われましたが留学と証券業務の夢は捨てがたく、丁重にお断りさせて頂きました。その幸田さんとはそれ以来45年の付き合いです。この営業経験は、野村の京都支店での新人時代に花が咲くことになります。まぐれで初年度実質、同期トップの営業成績を納めたのです。

野村證券に入社して10年後にモルガン・スタンレー東京駐在員事務所に転職します。同証券東京支店の立ち上げを成功させた後、ファースト・ボストン証券(現クレディ・スイス証券)の在日代表東京支店長を務めました。その貢献の報償として、最後の3ヶ月間、ハーバード・ビジネス・スクールでAMPを受講。1996年7月4日の独立記念日に、



2018年1月 日本・ベトナム文化交流協会から  
ホーチミン癌病院へ1億ドン(約50万円)寄付

45歳で現在のキャピタル・パートナーズ証券を創立。日米欧の証券で22年、独立して22年。証券業務一筋44年。縁あって日本ベトナム文化交流協会の理事長も12年兼務し、活発に日越友好親善活動を展開しています。今年も既にベトナムには3回出張しました。来週もNYに1週間ほど出張します。「66歳にもなっていない加減にしたら」と妻に呆られています。「三つ子の魂百まで」です。好きな仕事は健康であれば続けられます。恐らく私は死ぬまで仕事をします。野村シンガポール時代に生まれた長男大志は大学3年の夏に大学を中退して漫画家になりたいと言い出しました。今では週刊少年ジャンプの「ぼく達は勉強ができない」を好評連載中です。好きこそものの上手なれ。後輩の学生諸君には一生かけて打ち込める好きな仕事を見つけて頂きたいと心から願っています。時には迷うこともあると思います。そんな時は、原点回帰、つまり北極星を見続けることが大切だと思っています。

## リレー随想

# 九大の思い出と 公認会計士の仕事



柴田祐二公認会計士・税理士事務所

**柴田 祐二氏**

1984(昭和59)年卒  
1986(昭和61)年博士入

昭和59年3月経済工学科卒業、61年修士課程修了の柴田祐二です。私は現在、公認会計士・税理士事務所を開設しております。今回執筆の機会をいただきましたので、学部在学から現在に至るまでを少し振り返りたいと思います。

学部在学中は平凡な学生生活を送っていましたが、将来の職業について考えるようになったときに、親類に弁護士がいた影響から資格を活かした仕事につきたいという思いが強くなりました。資格のなかでも、医師、弁護士とともに三大国家資格と言われる公認会計士に興味をもち、できれば公認会計士になりたいと思うようになりました。

学部卒業後は大学院に進学し専門の研究をする一

方で、公認会計士試験にも取り組み、昭和63年9月に無事合格。その年の合格者数は350名、合格率7%でした。1,000名、10%を超えている最近の状況からすると、当時の方がこの資格の希少価値が高かったように感じます。

合格したときに、学生掛の方が「経済工学科卒の公認会計士は第1号ではないか」という話をされていたのを思い出します。私より前の合格年次の方にこれまでお会いしていないことから、あのお話は正しいと思われま

す。また、経済工学科卒の会計士に関しては、もともと数学・統計学には強く、監査業務における適性は高いと、一緒に仕事をした後輩を見て思います。

試験合格後は大手監査法人に入所、28年間勤務し、その後独立。早いもので30年近く立ちました。

公認会計士の仕事は、大きく①監査、②コンサルティング、③税務（税理士登録が必要）の3つに分けられます。このうち、公認会計士だけに認められた独占業務が監査です。監査では、企業等の決算書（財務諸表）が正しく作成されているかについて、第三者の立場からチェックを行います。監査が社会・経済を支える非常に重要な仕事であることは、昔も今も全く変わりません。

ところで、私は会計士協会で平成25年から3年間、福岡、佐賀、長崎の各県内の大学を訪問し、公認会計士の仕事や試験制度について学生の皆さんに説明を行うことを担当しました。この活動を通して、学生の方と直に接することができましたが、その中で感じたのは、公認会計士の認知度はそう高くないということでした。聞いたことはあるが、仕事の内容がいま一つよくわからないという声が多く聞かれました。主な仕事である監査の業務の性格上、一部の企業等の方としか接点がなく、身近な職業でないことがその要因と考えられます。テレビの影響は強く、医師や弁護士のようにドラマに取り上げられることがほとんどないことも要因との意見もありました。監査を受ける対象範囲は広がり、業務は拡大する傾向にあるなかで、優秀な人材の確保は業界にとって大きな課題です。その意味で認知度を上げる活動は大切となっています。

最後に、大学院を含めて九州大学には8年半と長くお世話になった分、同窓会活動等を通して、少しでもお役にたてればと思う今日この頃です。



## リレー随想

つながり  
—経済学部からQBSへ—

ファイナンシャル・プランナー

藤吉 由貴氏

2002(平成14)年卒  
ビジネススクール15期在

私達は誰でも、家族、同僚、友人、取引先、そして、この同窓会等、目に見えない無数の「つながり」の中で、人生を生きています。年を重ねるごとに、また、15年ぶりに再び母校である九州大学経済学府で学ぶことになった今、その大切さをより強く感じるようになりました。経済学部生時代、学業以外では、国際的な学びを得たいと思いJTW (Japan Today's World) プログラムのサポーターに応募し、アジアや欧米の留学生と国際交流を行っていました。ただ、門限の厳しかった私は、「亭々舎」で朝まで将来の夢を語りあうどころか、同級生との夕食ですら数回行くのがやっとでした。数回とは、週でも、月でも、年でもなく、卒業するまでに、です。携帯電話も買わせてもらえず(今では時々手放したいと思う存在ですが)、連絡にも苦労しました。学業では、経済学・経営学の面白さ、奥深さに気付きながらも、単位を取ることに終わった後悔がありました。自宅から僅か数キロの母校は、どこかしらやり残した想いのある少し寂しい存在でもありました。当時、私がインターネットを使うには中央図書館に行く必要があり、容易に知りたい情報にアクセスできる環境ではありませんでした。「つながり」のきっかけを見つけられないままの4年間でした。仕事上の専門性を高めたい、経営学を勉強し直したい、同級生や先生方ともう一度じっくり語り合いたい、という想いが強くなる中で、ふと、経済学部の同窓会総会に参加してみよう、という考えが浮かびました。同窓会では、学部生時代に教えてくださった懐かしい先生方やビジネスの第一線で活躍されてきた先輩方に出会えたことで、もう一度母校で学びたい、という想いはさらに強くなりました。

現在、私が学んでいる九州大学ビジネス・スクール「経営修士(専門職)課程」は、製造、卸、小売り、



伊都キャンパスグラウンドにて(ドローンによる撮影)

鉄道、医師、コンサルタント、弁護士、SE、デザイナー、建築士、ネイリスト、兼業農家、金融機関、経営者、起業準備中の方等、多種多様な職業の社会人で構成されています。台湾、中国出身の学生も多く、中には1カ月の飲み代よりも交通費の方が安いという理由で、毎週上海から博多<sup>1</sup>まで通学している中国人の弁護士もいます。各々が専門分野を持ち、仕事モードで教室に入ってくるクラスメイトの、ディスカッションやプレゼンテーションは驚くほど積極的で真剣です。先生方はもちろん、クラスメイトからも非常に多くのことを学んでいます。各期の試験に加え、6時半から9時40分まで2コマの授業を週4回こなし、帰宅して課題レポートを書く毎日に、頭も体もクタクタですが、自らの社会人経験や専門知識にない分野に取り組むことで、物事の見方や思考法は大きく変化しました。

授業外では、昨年10月に伊都キャンパスで開催された九大祭への飲食店の出店(QSHOP)が大切な経験になりました。QREC(九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター)主催の起業プログラムの一環で、予選を通過した6チームが、各店ごとのROE(株主資本利益率)、EPS(1株あたりの純利益)、コーポレートガバナンスを競い合って勝敗を決定するというものです。各メンバーやベンチャーキャピタルの出資と銀行融資による資金調達を行い、事業計画書・報告書の提出、株主総会の開催、大手監査法人の監査も受けるという本格的なイベントです。2日間の九大祭は天候にも恵まれ、私の参加したネパール出身のクラスメイトをCEOとする料理店「Himalayan & Spices」はQBSとして初優勝することができました。10代の学部生に混ざっての出店とあって、アラフォー社会人チームの私達に「業者の方ですか?」と親御さんから声を掛けられたのは笑い話です。賞金の多くを、税金と出資を受けたベンチャーキャピタルに持って

いかれたことで、出資の意味を、身を以って知ることでもできました。

現在は、「Execute Innovation-誰も気付かない価値がそこにある」を2018年のテーマとするQBSビジネスプランコンテストの準備を、運営メンバーとともに進めています。昨年クラスメイトに誘われて出場したのがきっかけで、ピッチコンテストの応援に行ったり、他のビジネススクールの学生と交流をもったりと、今まで無縁だった「起業」ということについて考える機会が多くなりました。既存の成功例をコピーする水平的進歩、つまり1からnに向かうのではなく、既存しないものを創造するという垂直的進歩、つまり、ゼロから1を生み出すこと<sup>2</sup>なしには、企業も個人も生き残ることが難しくなっています。AIに加え、国境や時間の制約のないギグエコノミーの広がりによって、労働者間のグローバルな競争も激しさを増しています。ビジネスプランコンテストの存在意義を、運営メンバーとともに何度も議論していく中で、改めて、自分自身の付加価値を高めていくことの重要性にも気づかされました。

九州大学経済学部の同窓会に参加するようになって3年、QBSに入学して間もなく1年が経とうとしています。この短い間に、多くのかげがえのない出会いやつながりが生まれました。人生100年時代といっても、同じ時代に同じ場所で出会う確率は、無限分の1に等しいです。大袈裟かもしれませんが、宇宙が誕生して138億年、なんらかの縁で「つながり」をもった人とは、長い時の流れの中の一瞬、奇跡に近い出会いです。私は、これからも、母校を通じて得たこの生涯の出会いやつながりを大切に、そして、この出会いや学びの場を提供してくれた社会に対して、少しでも貢献していきたいと考えています。

謝辞：同窓会に参加するたびに、温かく迎えてくださる原田準一様（先輩）、福岡支部事務局長の高



チーム「Himalayan & Spices」のメンバーと共に

木直人様（先輩）、本当に有難うございます。

#### 注記

<sup>1</sup> JR博多シティ9・10階（くうてんのフロア奥）（平日夜間）、箱崎・伊都キャンパス（土曜）で開講されている

<sup>2</sup> ピーター・ティール『ZERO to ONE』

## リレー随想

### 私の留学生活@九大



日本工学院専門学校

**藤本（金）海艶氏**

2005(平成17)年修士修了  
2016(平成28)年博士入

私は、2001年7月に、中国の経済系の大学を卒業後、10月に九州大学に留学生としてきました。それから現在に至るまで17年という長い年月を日本で過ごしています。この度は、私に寄稿の機会を与えてくださった皆様に深くお礼を申し上げますとともに、この17年間を振り返ってみたいと思います。

#### 1. 来日のきっかけ

私は、中学生の頃から日本語を勉強し、大学では国際貿易と日本語二本柱を中心にする国際商務外国語学科を専攻していました。中でも日本語のスピーキング科目は、日本の大学教授を招き、全て日本語で授業を行っていました。私はこの授業で日本語と日本の素晴らしさを知り、日本が大好きになりました。そして大学3年の時に九州大学への留学を決意しました。

#### 2. 九州大学での研究生生活

昼は授業と自習室での勉強、夜は12時近くまでアルバイトをして学費と生活費を稼いで、そこから学校か自分のアパートに戻って朝の4時ぐらいまで勉強していたので、お風呂や食事の時間を引くと睡眠時間は2、3時間程度でした。人一倍負けず嫌いで、頑張り屋であると自覚していた私でしたが、九大では語学の壁と日中間の教育内容の違いで、勉強に全くついていけず悔しい思いもたくさんしました。

中でも最も苦勞したのは、英語の勉強でした。それまで全く英語と縁がなかった私が、修士課程の入

試に挑むため英語を勉強しなければなりませんでした。最初はどうすればいいかわからずただ茫然としていたことを覚えています。ですが、やるしかない！受かるしかない！私はひたすら英語の辞書を片手に、英文を訳していきました。最初は短い文章を訳するのに2、3日もかかりましたが、徐々に上達していきました。何よりも周りの人が私を励ましてくれたり、助けてくれたりしたのが私にとって本当に大きな力になりました。おかげ様で私は無事合格することができました。私はあきらめずに頑張れば必ず結果はついてくることを、身をもって経験できました。

### 3. 大変ながらも楽しい大学院生活

睡眠時間は相変わらず毎日2、3時間でしたが、大学院での勉強は楽しくてたまりませんでした。特に印象に残ったのは修士論文です。

当時中国は海外からの投資が盛んで、関連書籍・文献は先進国による対中投資ばかりでしたが、私はあえて「中国企業の海外進出」をテーマに、修士論文を書きました。理論上でも先進国多国籍企業による海外進出理論は多いですが、中国のような後進国多国籍企業による海外進出理論は存在せず、私はまず理論的な仮説を立て、それからケーススタディを通じて仮説を証明しました。途中何度もくじけそうになりましたが、教授の「自分の選んだ選択に対して責任をもって！」という優しさと厳しさのある言葉に私は最後まであきらめずに完成させることがで

きました。今でも私は指導教官をはじめ修士論文を指導してくれた九大の教授達に心から感謝しております。

私の九大生活を語るには、清水ゼミ終了後の鍋パーティは欠かせません。清水ゼミではこの鍋パーティを私の苗字「金」を使って「金々パーティ」と呼んでいます。私の愛称も「金々」で今でもこのあだ名が大好きです。ゼミの後に、みんな集まって鍋を囲んで笑い、悩み相談し、そしてまた次のステップへと進んでいきます。また一人暮らしの人には貴重な栄養源になったとか…

今でもその当時のゼミ生が集まると、鍋パーティの話題で盛り上がっています。私たち一人一人の悩みに耳を傾け、常に励ましてくれた清水先生がいたからこそ、私も学生生活を無事終えることができました。

### 4. 現在の私

今、私は2人の子育てをしながら日本工学院専門学校で仕事しています。また九大の社会人博士課程の勉強もしております。毎日バタバタしていますが、常に前向きな気持ちで過ごしています。だって今の何倍も大変だった留学生生活も無事終了したんだもの。九大での生活は今の私にとって、何事にも果敢に挑戦し、前向きに前進する勇気と強さをくれました。

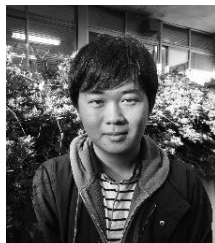
## インターゼミ紹介

### 「つながり」

小津ゼミ

経済学部経済・経営学科3年

矢上 寛大氏



この度は同窓会報に投稿の機会をいただきありがとうございます。

私たちは現在小津ゼミナールで会計学を学んでいます。私たち小津ゼミナールでは毎年、3年生4年生全員で1本のグループ論文の執筆を行い、ゼミ生全員で研究を進めています。全員が集まり時間を気にせず論文の執筆を進める絶好の機会として、毎年夏ごろに合宿を行うことが恒例となっています。私

たちは今年度、論文を完成させるため2017年9月に2日間、佐賀県唐津市で大分大学経済学部の中村ゼミの皆さんと一緒に1泊2日の合同合宿を行いました。中村ゼミの皆さんは昨年度の冬に九州大学箱崎キャンパスにお越しになり、私たちのゼミとインターゼミナールを行いました。今年度のはじめに、中村ゼミの方々より合同合宿のお誘いのお話をいただきました。合同合宿は初めての試みです。それから学生どうしで連絡を取り合うようになり、当日のタイムスケジュールや、宿泊先などの計画を進めていきました。合同合宿当日、私たちはジャンボタクシーで佐賀県唐津市に向かい、宿泊先で中村ゼミの皆さんと合流し、昼過ぎより同じ会議室にてそれぞれ勉強を開始しました。

私たち小津ゼミの今年の研究テーマは、「日本企業のイメージ戦略と働き方改革が与える就活生への影響—スコア化と経営分析を通して—」です。昨今ニュースで話題になっている「働き方改革」に関し



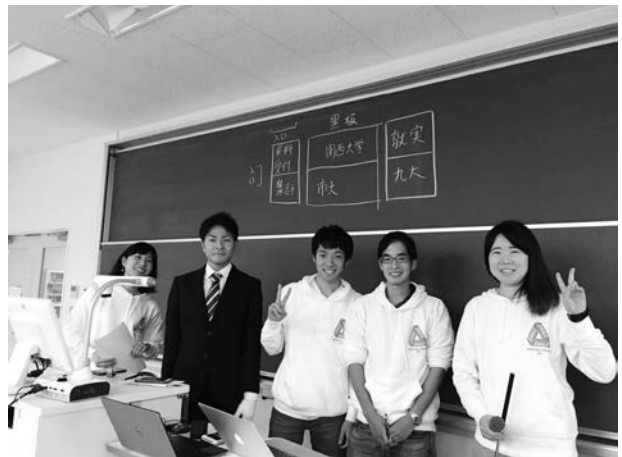




行われたインターゼミに参加しました。計11チームが参加し、鷺崎ゼミからは3チームが参加しました。私たちは今年の研究テーマである「地場産業」について研究を重ねており、それぞれ八代のい草・畳産業、久留米の足袋・スニーカー産業、長崎のべっ甲産業についてプレゼンテーションを行いました。開始時は初対面の人を前にして、ただならぬ緊張感が漂っていました。しかし、いざ発表が始まると緊張感は徐々に和らぎ、発表者は長い時間かけて準備してきた成果を出そうと、また聴講者は真剣に発表を聴いて新しい知識を吸収しようというひたむきな姿勢が見てとれました。固かった表情も次第に柔らかくなり真剣にかつ楽しみながらプレゼンテーションを聴くことができました。質疑応答の際には積極的に手が上がり、活発な議論が交わされました。学内の発表では指摘されなかったような思わぬ所を質問されて新たな問題点に気づかされ、今後解決すべき課題を発見することができました。

このインターゼミでは、普段は交流することが少ない他大学の学生に対して各々の研究に対する報告や議論ができたという点で非常に有意義でした。他大学の研究内容はとても新鮮で大変興味深いものばかりでした。それまで全く知識がなかった分野について学んだり、研究に対する新たなアプローチ方法について気づくことができ、視野を広げることができました。九州大学という狭い環境しか知らなかった私にとって、他大学の学生の前で研究報告をし、他大学の研究に触れるという経験は貴重なものでした。各大学それぞれ価値観や特色が異なっており、交流することで初めて自分たちの強みや個性について知ることができます。その強みを活かしつつ、他大学の良い点を吸収して今後も研究を続けていきたいと思います。

このインターゼミの最大の成果として、班員との「絆」を深めることができたことを第一に挙げます。



発表の時間は20分という短い時間ですが、そこに至るまでの過程は大変なものでした。私たちの研究に対してそれほど知識がない学生に対してどうしたら分かりやすく伝わるだろうか、発表をどう工夫したら聴衆をより引きつけることができるだろうか、限られた発表時間の中でどう構成していくかなど、班員と何度も集まって試行錯誤を繰り返しました。自分の時間を犠牲にすることが多く、時には逃げ出したくなることもありましたが、それでも互いに協力して励まし合いながら乗り越えてきました。インターゼミに向けて班員で協力して課題を解決していく中で築き上げられた「絆」はかけがえのないものです。このインターゼミは私にとって一生忘れることのできない良い思い出になりました。

さて、結果ですが11チーム中上位3位を鷺崎ゼミが独占することができました。努力が報われて本当に嬉しかったです。それと同時に、ゼミ内で切磋琢磨し合える恵まれた環境にいるということを実感し、誇りに思いました。インターゼミ終了後はよりいっそう3班の間で火花が散るようになりました。今後もお互いに高め合いながら研究を続けていきたいです。インターゼミからはそういった活力も得ることができました。

今回のインターゼミでは他大学と交流することで新たな見地を獲得でき、また仲間との絆を深めることができました。他大学の学生の前で研究を発表するというのはこのインターゼミでしか経験することができません。インターゼミを通じて新たな問題点や今後の展望を発見することができ、多くのことを学ぶことができました。今後も、経済学部の学生がインターゼミに積極的に参加して、大きく成長を遂げることを願っています。

## 経済学部同窓会会則

(名称)

第1条 本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 講演会、懇親会の開催
- (2) 卒業生名簿の発行
- (3) 会報の発行
- (4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

(本部並びに支部等)

第4条 本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6-19-1）に置く。  
本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

(構成)

第5条 本会は次の者を以って構成する。

- (1) 九州帝国大学法文学部経済科卒業生
- (2) 九州大学経済学部卒業生
- (3) 九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
- (4) 九州大学経済学部および大学院経済学府在校生
- (5) 九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
- (6) 上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

(役員)

第6条 本会は次の役員を置く。

理事25名以内、評議員各卒業年度最低1名、監事2名、顧問若干名

- 2 理事のうちから会長を1人、副会長を若干名選任する。
- 3 役員任期は3年とする。ただし、重任を妨げない。
- 4 (1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。  
(2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。  
(3) 理事については別に規定する。  
(4) 評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。  
(5) 監事は本会の会計を監査する。  
(6) 顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

(理事ならびに理事会)

第7条 理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

- 2 会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。
- 3 理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

(総会)

第8条 本会は毎年1回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。

- 2 通常総会では次の事項を承認する。
  - (1) 予算および決算に関する事項
  - (2) 役員の選任、会則の制定および変更に関する事項
  - (3) その他本会の運営に関する事項
- 3 総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

(運営)

第9条 本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(個人情報の保護)

第11条 本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

- 2 本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

#### ※会費規定

1. 会費は1人年額1,500円とする。
2. 会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
3. 必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
4. 会費規定は理事会の議により変更することができる。

#### ※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは3分割または6分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は3年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。なお、第5条の(4)について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回（1.5年間で納入完了）
③	6分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	3年毎に	4,500円ずつ（11回～49,500円の納入で完了）

#### 附 則

本会則は、平成8年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年2月10日に改定され、同日より施行する。



## 九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)  
 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)  
 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)  
 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)  
 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)  
 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)  
 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)  
 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)  
 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)  
 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)  
 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)

## 同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費(45,000円)と普通会費(3年間分4,500円)になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- |       |      |                             |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括   | 45,000円                     |
| ②     | 〃    | 3分割 15,000円×3回(1.5年間で納入完了)  |
| ③     | 〃    | 6分割 7,500円×6回(3年間で納入完了)     |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ(11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年(2006年)3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成30年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がございましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。



**九州大学経済学部同窓会事務局** (開室：平日の月・火・木・金 10時～17時)

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学経済学部内

TEL 092-642-2442/FAX 092-642-2348/E-mail : dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。  
 適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。